早稲田大学社会科学部
学部生・卒業生・教職員を繋ぐ
Communication Magazine

社学稲門会

WEB発行第3号

題字：第3代学部長・故木村時夫名誉教授

No.18

「社学二水会」会報
通巻18号

連載企画『がんばれ！同窓生』第２回
自分の身体の可能性を信じて自分自身に生きる力を！／
振付家・アーティスト・香瑠鼓 …… 2

「社ガールの会」活動報告
香瑠鼓さんとの出会い／林　由紀 …… 6

連載企画『がんばれ！同窓生』第３回
『志があれば道は拓ける』を信じ
「吉田松陰研究」に辿り着くまで！／
松陰大学客員教授・長谷川　勤 …… 8

連載企画『がんばれ！同窓生』第４回
コンフォートゾーンからの脱却で
人は成長し変わることができる！／
㈱ジョブウェブ　代表取締役会長・佐藤　孝治 …… 12

ゼミリレー⑰　池田　雅之 ゼミ
研究と社会貢献の両立を目指して／上江洲 慎 …… 18

「社撮写真倶楽部」活動報告
「スカイツリー」の夜景を撮る！ …… 20

奨学生寄稿
これまでの大学生活を振り返って／稲垣　里帆 …… 22
早稲田大学で迎えた人生の転機／西尾　妃南子 …… 24
大学生活について／勝村　将司 …… 26

奨学基金
社会科学部卒業生奨学基金報告の詳細 …… 28

「稲門会」報告
第22回社会科学部合同クラス会の案内 …… 30
社会科学部創設50周年／「繋がる奨学金募金」のお願い …… 31
第３回社学稲門会総会レポート …… 32
東日本大震災被災地支援活動「復興BAR@銀座」 …… 34
平成27年度「社会科学部稲門会」年間予定表 …… 35
編集後記 …… 36

Come & join us again!　Come & join us again!　Come & join us again!　Come & join us again!　Come & join us again!　Come & join us again!

振付家・アーティスト

香瑠鼓（かおるこ）さん

自分の身体の可能性を信じて 自分自身に生きる力を！

社会科学部は 2016 年に学部創設 50 周年を迎えます。これまでにすでに３万有余の卒業生を世に送り出しています。社会の壁と悪戦苦闘した勇者達、荒波をものともせずに乗り越えていった若者たち、そして今でも先頭を走り続ける仲間達。連載企画『がんばれ！同窓生』では、各界でご活躍、ご奮闘されている同窓生から直接お話を伺い、多くの同胞、特に若者たちに向けてメッセージを頂きます。

第２回は振付家でアーティストの香瑠鼓（かおるこ）さんから早稲田大学時代のことやこれから取り組んでいくことなどについてお話を伺いました。（文責：伏見英敏）

●オリジナルな活動を求めて

馬場　はじめまして、社学稲門会の馬場です。早速ですが早稲田大学時代の思い出話などをお聞きしたいと思います。香瑠鼓さんは、どんな風な学生時代をお過ごしでしたか？

香瑠鼓　じつはあんまり学校には行かなかったんです……。早稲田のイメージって、みんな自立していて、自分の考えのもとに好きなことをやるものだと思っていたんですが、入ってみてちょっと違うかなと思ったんです。もっと主体的に活動したいと思い、自分のオリジナルな活動を求めるにつれてだんだん行かなくなってしまったんです。

あぴフェスのワンシーン

馬場孝子さんと香瑠鼓さん（右）

馬場　じゃあ、良く行ったお店とか思い出深いお店はどうですか？

香瑠鼓　ないんですよね。寸暇を惜しんでレッスンしていたのでお酒を飲みにも行かなかったし……。高田馬場の BIGBOX くらいかな（笑）。

馬場　学生時代の早くから努力なさっていたようですが、今の仕事に役立ったことってありますか？

香瑠鼓　う〜ん、早稲田って学部を超えて学生間の交流はさかんだったですね。他学部の人たちとも交流して、そうやって視野を広げていけたと思います。たとえば同年代では数年前に某県知事になられた方や、ラサール石井さんたちがいました。ラサール石井さんは、当時ミュージカル研究会を主宰されていたんですが、（刺激を受けつつも）自分のカラーと合わなくて、結局自分で何かを立ち上げたいなと思うようになったんです。

馬場　もう学生時代から今のお仕事をなさろうと考えていらっしゃったんですか。就活などはされなかったんでしょうか。

香瑠鼓　就活ってしてないです。大学４年の時に『HAIR』というミュージカルで主役としてオーディションに合格したんです。そのために留年しちゃいましたけど。

●日本人の多様性、感性に誇りを

馬場　これまでお仕事をする上で一番大切にされてきたことってどんなことですか。

香瑠鼓　私はオリジナルにこだわってきました。日本発の世界でまだ見たこともないものが創りたかったんです。私は学生時代から日本人の感性に誇りを持っていて、大切にしたいなと思っていました。まわりの人たちはなんで外国の真似をするんだろうと……。たとえば『八百万の神』とか『森羅万象』。われわれ日本人独特の全てのものに神様が宿っているという考え方や自然との共生。日本人が誇りに思っているものをフィーチャーしてパフォーマンスにしていくことがやりたいんです。

馬場　そのあたりをもう少し詳しく聞かせていただけますか。

香瑠鼓　伝統的な能の世界では、『すり足』ひとつとっ

●香瑠鼓さんプロフィール

1957 年東京生まれ、早稲田大学社会科学部を卒業。振付家・アーティストとして活躍中。
1989 年 Wink の「淋しい熱帯魚」1990 年 B.B クイーンズの「踊るポンポコリン」はじめ、慎吾ママの「おはロック」、新垣結衣の「ポッキー」、ダイワハウス「ベトナムにも編」、最新作 EDWIN の CM まで、手がけた振り付けは 1000 本以上。国内外のダンス公演活動とともに、これまで 20 年にわたり、障がいを持つ人を含めて行う「バリアフリーワークショップ」に注力。そこから開発した「ネイチャーバイブレーションメソッド」が近年注目され、東大はじめ、学校、自治体、企業などで講師やワークショップを手がける。即興アーティスト集団 ApicupiA（アピキュピア）を主宰し、定期ライブ「あぴフェス」やバリアフリーライブなど多数実施。昨年韓国の「障害者文化芸術祭」にも出演した。著作に「脳とココロとカラダが変わる瞬感動ワークショップ」（高陵社書店）。
香瑠鼓カラダラボスクールにて各種ワークショップ開講中。2015 年４月〜７月、東京大学にて非常勤講師。
HP：www.kaoruco.net/
facebook：www.facebook.com/KaorucoArt

香瑠鼓さんとアピキュピア

あぴフェスのワンシーン

てみても足の重心を前にかけるのと後ろにかけるのでもぜんぜん違う感じ方になります。日本人の多様性、能面のように、泣いているような怒っているような、笑っているような感じ。たとえば恨めしいけど好きだとか、恥ずかしいけれど結構積極的っていうような割り切れない感情っていうのかな、それがすごく面白いと思います。

馬場　そういうことに関心があってそれを再現していきたいと……。

香瑠鼓　そうですね。再現というより伝統をふまえて新しいものを創りたいです。

●振付家の仕事で売れてしまいました

馬場　今のお仕事のきっかけはどんなことだったのですか。

香瑠鼓　作詞家の森雪之丞さんが誘ってくださったバンド（Mighty Opera）に参加したのがきっかけですかね。このバンドにはラッキィ池田さんも誘いました。そうこうしているうちに石井明美さんを紹介されて、『チャ・チャ・チャ』の振り付けを担当することになり、そしてベイブというアイドルグループ、次が ウインク。まずは裏方で売れてしまったんですよね（笑）

馬場　売れたということは、認められたということですよ。

香瑠鼓　そのころの自分は、オリジナルパフォーマンスにこだわっていて、世の中の流れと違っていたんですね。その当時つくったものは今でも面白いと思うんですけど、少し（時代より）早すぎて売れなかった。その頃にウインクに出会ったんです。こっちは毎日毎日努力してもなかなか売れないのに、（それほど努力していなくても）売れてしまっているアイドルがいる。なんか納得がいかない。でも気づきました。自分が良いと思っていても地球の流れというか……ビートに乗れていないなと思ったんです。

その頃の日本はバブル時代で、私のようにガツガツしていてはウケない。逆にウインクのようなホッとするものがウケたんでしょうね。ウインクに対しては、振り付けの意味から教えていきました。私が厳しいものだからぎこちなくなって、かえってそれが良かったりして（笑）。

馬場　それだけ相性が良かったんじゃないでしょうか。

香瑠鼓　その時、一度自我をなくして流れというかビートに乗ってみたらどうかと思いました。その中でいかに自分のオリジナリティ、感性を保つかが仕事になるということがわかりました。

馬場　自我をなくすという切り方はすごいと思います。では今現在、お仕事をする上で一番大事にしていることってどんなことですか。

●ネイチャーバイブレーションメソッド

香瑠鼓　『ネイチャーバイブレーションメソッド』というオリジナルメソッドを作ったのですが、これは「生まれつきの自分の役割を引き出す」というものなんです。自然界との共振……私には花や木や石や自然界の全てが歌っているように聞こえます。歌っていること自体が自由で楽しくて、それらと共振することをメソッドにできないかと。私のところに来ている重度の障害を持った方たちとも助け合え、お互いをいかすメソッド。いろんな人とのかかわりの中で一番いい答えを見つけていくというか、相手や状況などを受け取って、

バリアフリーライブ『あぴラッキー』@横浜ラポール

固定観念でない一番良い答えを出すことと言ったらよいのかな。

馬場　障害者の方たちとのかかわりについてお話していただけますか。

香瑠鼓　私の妹が足が悪く、彼女自身が障害者のボランティア活動をしていた関係もあって、私のプロデュースした公演にたくさんの学習障害の子供たちを招待したんです。ある時、私のダンスパフォーマンスを見た女の子が弟子にしてくれと言いに来ました。（その子のお母さんの話では、）彼女は生まれて初めて自分からやる気をだしてくれたんです。それがきっかけでこれまで約20年間、障害者の方たちと『あぴラッキー』というバリアフリーなエンターテイメントライブ公演を日本全国で展開してきました。昨年は、そのプロチームが韓国に行って公演をしてきました。50～60代のお客様も多かったのですが、韓国の方たちは熱気がありびっくりしました。

　ネイチャーバイブレーションメソッドは、シンプルでその人によって伝え方が変わってくる。陰と陽のように対極的で（固定的な）答えのないもの、言いかえれば10人いたら10の答えがあるものなんです。このメソッドを通じていかに自分を自由に開放させるかという方法を見つけるものなんです。

馬場　私たちもこんどワークショップに参加させていただくんですけれど楽しみですね。香瑠鼓さん、これからの活動についても教えていただけますか。

香瑠鼓　東京大学の教育学部の非常勤講師としてネイチャーバイブレーションメソッドを教えることになりました。以前、うちのダンス教室に通っていた大阪の拒食症の女子学生がいたんですが、うちのレッスンに来ると食事が出来ると言って、通ってきていたんです。その生徒がその後頑張って東京大学の博士課程に進み、同じ研究室の人と私のメソッド関連の研究をしてくれています。みんなの研究に役に立つような授業ができたらいいなと思っています。

『あぴラッキー』に関しては、ドキュメンタリーフィルムを作り、海外にも広めようという話があります。いろんな国で『あぴラッキー』の公演を開催してつながれたらうれしいですね。

　それからネイチャーバイブレーションメソッドを全国に広めたいので、メソッドのネット配信も考えています。これだと遠隔地の方や学校でも利用できます。

馬場　それでは香瑠鼓さん、最後に早稲田大学社会科学部の学生に向けてメッセージをお願いします。

●自分の身体の可能性を信じて自分自身に生きる力を

香瑠鼓　私が何故即興のネイチャーバイブレーションメソッドをやっているかというと答えが無いからなんです。固定観念上の答えが無いからこそ面白いんです。答えは即興の中で自分で見つけるんです。自分で自分自身の能力を限定しないでと言いたいです。

　今の時代、安定的なものってもうないと思い、自分自身に生きる力をつけるということが必要だと思います。そのためにはまずひとつしかない自分の身体の可能性を信じましょう。身体は独自で絶えず良くなろうと頑張っています。身体を開き運もつかんでいきましょう。

馬場　本日は素敵なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。またお目にかかりたいです。

「社ガールの会」活動報告

香瑠鼓さんとの出会い

林　由紀（昭和 59 年卒）

1984（昭和 59）年卒業の林由紀と申します。今年の第 3 回社学稲門会総会では香瑠鼓さんにゲスト出演していただき、素晴らしいパフォーマンスを披露していただくことができました。「社ガール」としての初めての企画が、この様な形で実を結びとても嬉しく思っています。香瑠鼓さん、そして応援してくださった皆様、ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

さて、「社ガール」は約 1 年前に発足しました。早稲田大学社会科学部 OG 及び現役女子学生で構成されています。社学創設 50 周年記念事業に微力ながらも貢献できればと考えております。

●妹の梨華さんとは中高の同級生で…

昨年末、社学稲門会の総会にゲスト出演していただける方に心当たりはないかと聞かれて、真っ先に思い浮かんだのが香瑠鼓さんでした。勿論、社学の先輩ですが、妹さんの梨華さんと私は中高の同級生で香瑠鼓さんは同じ学校のかっこいい先輩だったのです。

梨華さんとは高 1 の時に同じクラスでした。スラッとしていて、バンドでドラムを叩いていて、ミュージカル部で活躍していて……で、休み時間にはだるそうに机の上に片手を投げ出して突っ伏していました。「わあ！イガちゃんて、かっこいい！」と淡い憧れが……。

そのミュージカル部を立ち上げたのが香瑠鼓さん。文化祭でのステージは本当に素敵でした。クオリティーが高くて高校の文化祭のレベルをはるかに超えていました。香瑠鼓さんは私達の憧れだったのです。梨華さんが机に突っ伏していたのは、病気に苦しんでいたからだ、と知ったのはつい最近のことです。

●香瑠鼓さんのネイチャーバイブレーション

卒業後、香瑠鼓さんは振付家として大活躍。CM やアイドルの振付を見るのが楽しみでした。私は香瑠鼓さんとは面識がなっかたので、ミュージカル部だった同級生に紹介してもらい、お目にかかりました。急な申し入れでしたが、総会のゲスト出演を快く受けてくださいました。私はこの時まで振付家としての顔しか存じませんでしたが、お話を伺って香瑠鼓さん自らが考案した「ネイチャーバイブレーション」がとても素晴らしいと思いました。

「ネイチャーバイブレーション」は、周囲の人やモノから受け取ったイメージを、身体や声で即興表現することで、心と身体と脳に大きな変化をもたらすメソッドです。自分の隠された個性や魅力を引き出し、周囲とのコミュニケーションを広げていくことができます。企業の研修や東大の授業にも取り入れられ大きな効果をあげています。

●ワークショップに参加して

私もお会いして 5 日後にワークショップに参加しました。スタジオのドアを開けた瞬間、スタッフの方々の雰囲気がとても素敵でうれしくなりました。丹田を意識した腹式呼吸を基本にストレッチから始まり様々なメソッドを行い、最後は香瑠鼓さんのアドバイスをもとにアシスタントさんと自由な表現をしてみるのです。とても気持ちよくて楽しいです。血液やリンパが

アピフェスで踊る筆者（右）

アピフェスにて、タツヤさんを囲んで、
左から社ガールの馬場さん、筆者、山野さん、井上さん

アピフェス公演後、タツヤさんと筆者

流れにくくなると身体の調子が悪くなるように、気持ちがつまると心の調子が悪くなるのでしょうね。

また、障害者の方のためにバリアフリーワークショップを 20 年にわたって行っています。障害を持つ方は自分の気持ちをうまく表現できず伝えられないもどかしさを強く感じています。「ネイチャーバイブレーションメソッド」では障害のある方の動きや声を受け止めます。自分を受け入れてもらえた喜び、表現できたという喜びが、爆発するような大きな変化を見せることがあり、心を開き、新しい人生を切り拓いていった方がたくさんいらっしゃいます。

●真のグローバル化の一助として香瑠鼓さんの応援を

そして、民間レベルでの国際交流を目指しており、韓国で開催された国際的な障害者文化芸術祭に参加し、パフォーマンス、メソッド共に素晴らしい評価をうけました。香瑠鼓さんの夢は世界を回って公演することだそうです。言葉が通じなくても、声と動きで心が伝えられます。『森羅万象が宿っている肉体を傷つけること＝戦争』をなくしたいというのが究極の願いだそうです。

想真さんのソロ公演にて、香瑠鼓さん、想真さん、筆者

社学創設 50 周年を来年に控えた今、グローバル化の重要性が論じられています。

真のグローバル化とは何なのか議論は尽きないところです。私ども「社ガールの会」では女性の視点からグローバル化へのひとつのアプローチとして、香瑠鼓さんが考案した「ネイチャーバイブレーションメソッド」を用いた活動を応援していく事に意義があると考えています。

自分と他者、男性と女性、障害者と健常者、自国と他国、等々、様々な個性を持った人達が、お互いを認め合い、生かし合うことができたらと願い、まずは自分の心を開くことから始めたいと思っております。

●林　由紀さんプロフィール

東京都出身、1984 年卒、長田ゼミ（社会学）、近代会計学会、GREEN テニスクラブ、LEI 日常英語研究会。
11 年間電機メーカー勤務の後専業主婦。
趣味：演劇（観る、演じる、両方）、嵐のライブ、絵画鑑賞（特に浮世絵）
最近読んだ本：「役者は１日にしてならず」
近況：古着屋で働く長男、高校３年受験生の次男と楽しく暮らしております。演劇ワークショップに通う傍ら、仲間と芝居の稽古をするのが楽しみです。

明日香さんのソロ公演後、筆者と明日香さん

松陰大学客員教授
長谷川 勤さん

『志があれば道は拓ける』を信じ「吉田松陰研究」に辿り着くまで！

平成 27 年の NHK 大河ドラマは、吉田松陰の妹、「文」を主人公にした『花燃ゆ』が放送されています。

早稲田大学社会科学部の２期生（昭和 46 年卒）の長谷川勤さんは、松蔭大学の客員教授として教鞭をとり、同時に吉田松陰の研究家として、各地で講演や講座を行っています。そして今まさに NHK のラジオ第２放送で『歴史再発見　松陰と幕末・明治の志士たち』という講座を展開中。

勤労学生だった早稲田大学時代のお話や、日本近代史とのかかわりについて聞きました。

（文責：伏見英敏）

●社会科学部入学までの長い道のり

広報　長谷川先輩、今日はよろしくお願いします。まずは、長谷川さんが早稲田を目指した経緯などをお聞かせいただけますか。

長谷川　私が群馬県勢多郡黒保根村（現桐生市）の中学校を卒業したのは、昭和 37 年です。当時、周りのほとんどの同級生が中学を出たら就職するというのが普通でしたから、私は三菱電機という巨大企業に迷わず就職致しました。

そこで３年間、給料をもらいながら、工業高校のような勉強をし、これを卒業すると現場に配属になるという、いわば社内高校みたいな制度（その昔は、こういう制度を乙種工業高校と呼ばれました）。そこに籍を置いたわけです。

15 歳で就職した後で、ある先輩から高校に入らないかと勧められて、自分でも「高校くらい出ておこうかな」という気になって、県立茅ヶ崎高校の夜間部に１年遅れで入学したのです。

２年生になった時、茅ヶ崎高校の掲示板に、ある大学の「入試要項」が掲示してありました。その内容をよく読んでみました。それまで自分の出身村の田舎の人間は殆ど進学してなかったので、高校や大学の受験の仕方が、私にはわからなかったのです。大学というところは、大いに勉強ができる学業優秀な人間だけが行く所だと思い込んでいました……。

ところがその入試案内を見たら、国語・英語・社会の３教科が受験科目と書いてある、「これなら俺にもできる！」と、実現の可能性を見出した時は、体中の血液が逆流するような感動体験をしました。

広報　企業内高校に通いながら受験の決意をされたのですか。

長谷川　普通に生活するなら失業の心配ない今の会社に残るか、または大学進学を目指すか。半年ほど真剣に悩んだ末に結局進学する道を選んで、２年生の３学期に都立小山台高校の夜間部に編入したのです。

ところが小山台高校のレベルが今までの高校と全然違うので、５だった成績が２や３になってしまった。英語で赤点をもらって、そこから奮起しましたね。仕事が終わって学校に行き、帰ってきて勉強し、翌日また会社に行って……48 時間睡眠なしで英語の勉強に打ち込み、再試験を受けて何とか合格しました。

ところが後で聞いてみたら、約 200 人の同級生のうちで再試験なしでパスしたのはたった２人だけでした。転校直後でそうした事情を知らなかった私は、「これは大変なところに来てしまったぞ」と思いましたが、今さら後戻りできないし、前進するしか選択肢がなかっ

たのです。

広報　そのころには早稲田が視野に入ってきていたのですか。

長谷川　小山台高校の３年次に平均値を超えるところまでたどり着いて、４年次には生活費と大学の入学資金の貯金ができたのです。この資金で行ける一番良い学校は……と考えたら早稲田大学の社会科学部と中央大学の法学部が浮かび上がってきたのです。

広報　晴れて早稲田大学の社会科学部に合格されたわけですね。

長谷川　早稲田に入学したら、会社に行くわけじゃなくて牛乳配達のアルバイトだけですから、勉強する時間がたくさんあった。勉強するのが楽しくて単位もどんどん取りましたね。昼間は他学部で聴講し、夜は社学で勉強し、１、２年と連続でフル単位取得と、卒業単位に使える夏期講座を、これまた２年連続で受講して単位を取得してしまい、３、４年は気楽に過ごしました。在学中の４年間で「不可」の成績は、教職資格を取る科目試験（第二文学部）と時間帯が重なってしまい、途中退場して文学部の試験へかけつけた時の１教科だけでした。

●勤勉で優秀な友人たちとの出会い

広報　私らの頃は大学に行っても遊んでばかりで恥ずかしい限りですが、当時の学生気質ってどんな感じでしたか。

長谷川　私が在学したのは昭和42年から46年だけですが、あの頃の社学生の半分以上は勤労学生だったのではないかな。経済的な理由で早稲田の社学にやってくる優秀な勤労学生が多かったと思いますよ。みんな一生懸命勉強していました。

広報　ご友人の思い出を聞かせていただけませんか。

長谷川　40代や30代の同級生も在学していて、いろんな人がいました。

島根県出身で昼間厚生省に勤務していた友人は、とても学業のできる人で優が35個と学年で３番だったかな。そのあと彼は全日空に入社しました。

また、とても能弁な友人もいて、彼は入社試験の時の面接試験で「尊敬する人物は大隈重信」と語ってリコーに入った。さらに、仙台二高のラグビー部出身で早稲田でもラグビー部で活躍した友人がいて、この友人は博報堂に入社しました。彼の会社の同期生に、後に私が研究することになった吉田松陰の妹と結婚し、群馬県の初代県令になった楫取素彦の末裔がいたのです。

●長谷川勤さんプロフィール

1946年群馬県生まれ。1971年早稲田大学社会科学部卒業、三陽商会入社。2006年より松陰大学非常勤講師。2015年より同大学客員教授。「吉田松陰論」を担当。明治維新の研究から出発し「吉田松陰なくして明治維新なし」との結論に至り、松陰研究に専念。日本歴史学会会員。

《NHK カルチャーラジオ》

「歴史再発見　松陰と幕末・明治の志士たち」
ラジオ第２放送
放送日　火曜日午後８：30～９：00
再放送　翌週火曜日午前10：00～10：30
６月30日から９月22日まで

人の縁は、何時、どこでどんな出会いがあるかわからないですね。そういう意味でも、早稲田って出会いの機会が本当に多い、素晴らしい大学だと思います。

広報　その当時は70年安保で学生運動が盛んだった頃ではないですか。

長谷川　時代的にはそうだったのかもしれませんが、私自身は学生運動とは無縁な生活をしていました。当時の社学は創設されたばかりで、社会的評価が定まっていなかった為か、皆さん本当に良く学んで頑張っていたと思います。

●難波田春夫先生、そしてアダム・スミス

広報　完全昼間部に移行して偏差値が高くなったということも現在の社学の人気の一因かもしれませんが、草創期の学生が良く学び社会に出てからも頑張ったことが学部の評価や信用を高めていった大きな要因ですね。その草創期の早稲田の社学に入って思い出に残る先生というとどなたですか。

長谷川　１年生の時の必修科目で、難波田春夫先生の社会科学方法論に出会い大変感動しましたね～。聴講

しているうちに武者震いがしてきて、聴き終わった後には大変に感動して虚脱感（過度の充足感）を覚え、動けなくなった思い出がありました。「ああ、こういうのが大学の学問なのだな」と心底から思い、最高の先生との出会いの妙や有難さに感謝しました。

広報　私たちの時の社会科学方法論は難波田先生の愛弟子の田村正勝先生が担当されていました。

長谷川　その後は、先輩に同行をお願いして案内を願い、難波田先生の研究室にご挨拶に行き、４年の時に難波田ゼミに入りました。

ゼミ論は「アダム・スミスの経済学成立事情」というタイトルでした。12 月くらいから昼夜逆転の生活で勉強してゼミ論を書き上げました。

アダム・スミスの『国富論』は、1776 年に著されたものなのですが、アメリカの独立宣言もこの年です。何度目かの改訂版が出されたのは 1789 年でフランス革命の年です。その時の日本は田沼意次の時代でもあるのですが、近代社会のメモリアルな時期に書かれたのです。

ちなみにアダム・スミスは、グラスゴー大学で道徳哲学の教授をしていて『道徳感情論』を著しています。国家・国民の秩序はいかにして形成されるのかというようなことを説いていたのです。人間は競争することによって生産性も上がり、さらに努力するということなのですが、1．社会の秩序を保つためには法が必要である。2．法を導くためには政治が必要である。3．政治をやり遂げるには国民が豊かでなければいけないという理論で、最終的には「経済」が社会科学の王座を占めるという教えを難波田先生から授かりました。

この『道徳感情論』と、後の『国富論』の関連性を理解することがとても大事で、日本評論社から出版された『グラスゴー大学講義』を読むとそれが解かるのですが、当時は絶版になっていて購入に大変な苦労をしましたが、執念で探し当てて購入できました。これが理解できると、難波田先生の『國家と経済』がとてもよく理解出来るのです。

広報　後任の田村先生の『ロゴスの導くままに』という教えを思い出します。

長谷川　難波田先生の講義を聞いて段々理解できるようになってくるのですが、理解できた時はものすごい感動を覚えましたね。学生時代は勉強もたくさんしたし、楽しくて仕方なかったです。

広報　そう言えば、長谷川さんの娘さんがエミレーツ航空に勤務されていた時にグラスゴーに行く機会があったという話を以前お聞きしましたね。

長谷川　そうなんですよ、ある時娘から「今度グラスゴーにフライトする」という連絡をもらったのです。「えっ、ちょっと待てよ。グラスゴー大学は私にとって思い入れのある大学だから、是非写真を撮って来てくれ」と頼んだら、２週間後にたくさんの写真を送ってくれました。あの時は感動したなぁ。自分が若かりし頃、一生懸命勉強したアダム・スミス、その憧れの人が教鞭をとった憧れのグラスゴー大学ですからね。

広報　素晴らしいプレゼントですね。他に学生時代で何か思い出に残る出来事はありますか。

長谷川　中学校を出てから９年後の大学４年生の時に教育実習で帰郷した時に、地元で大きな話題になりました。

広報　どうしてですか。

長谷川　当時、村では学年で１番か２番くらいの学生しか進学しないような状況でしたが、中卒で村を飛び出した若者が、９年経っていきなり教員の免許を取りに教壇に立ったので周りがびっくりしたのでしょうね。中学校で WASEDA のジャージを着て卓球の実技指導もしたこともあってか子供達と仲良くなって、普段勉強しない子たちも勉強しだしました。

テストの平均点も 75 点くらいになってこれまた周りがびっくりです。私の父親が大変喜んだらしく、後日そのことを聞いた時には嬉しかったですね。

●三陽商会入社から歴史学を志すまで

広報　卒業後は、教師ではなくて企業に就職されたのですよね。

長谷川　昭和 46 年に三陽商会に入社しました。我々の頃は業務拡大のために採用が多くて同期が 100 人以上いました。私は主に百貨店の担当で、平日に休みがあるものだからゴルフの練習も接待も良くやりましたよ。今は全然ダメになってしまったけど、良い時は HD13 くらいまでいったかな。

広報　三陽商会と言えばバーバリーというか、長嶋茂雄さんをイメージしますね。

長谷川　営業課長時代に長嶋さんにバーバリースーツの CM キャラクターになってもらいました。今でもその時にいただいた色紙が３枚あります。

広報　長谷川さんの課長時代だったのですか。長嶋さ

んの CM は記憶があります。

長谷川　それから 44 歳の時に働きすぎて病気になってしまい、100 日ほど会社を休んでしまいました。

広報　歴史との出会いはいつごろですか。

長谷川　長期病欠して会社での出世はもうないだろうなぁと思い、それからもともとやりたかった近代史をやろうと思ったのです。50 歳で慶応義塾の文学部の通信課程に学士入学しました。

同時にそのころ社学稲門会の前身の二水会にも参加していたのですが、合同クラス会の懇親会場で社会科学部の学生担当副主任だった島善高先生にお目にかかったのです。島先生は社学の名物教授だった木村時夫先生の後任の方で、近代史を勉強したいのですが、と相談を持ちかけたわけです。その後論文の試験に通って、大学院の科目履修生として 1 年間、島先生のもとで近代史の勉強の仕方を直接学ぶことになったのです。これが歴史との出会いの大きな一歩だったと思います。慶應の方は『福沢諭吉論』に取り組んで頑張ったのですが、なかなかレポートが通らない、5 回出しても駄目であともう少しで卒業のところまで単位を取得しながら中退してしまいました。

●遂に「吉田松陰研究」に辿り着くことに

広報　吉田松陰の研究はその後ですか。

長谷川　そうですね、ある時、郷里の友人から東松山にある大東文化大学で吉田松陰論の講座があるということを聞いて聴講に行ったのが始まりです。講座の後、帰りにその講師と一杯飲みながら話をする機会があり、「あなた、一度講義をしてみてはどうだ」と持ちかけられたのです。

次回は半年後だというので、『私も吉田松陰の勉強をしてみよう』ということになった。こういうことも一つの転機なのかなと思いますね。講義はテキストを読まないで語りかけるスタイルでやってみたら受講生の評判が良かった。大東文化大学の講座を何度かやっているうちに松陰大学の副学長のところにも『吉田松陰の面白い講座を持っている人がいる』という評判が届いたようで、お声が掛った。そこでこれまでに学んだことや考えなど経緯を手紙にして副学長に 3 度ほど送りました。

その後、松蔭大学の講師として招かれたのは 2006 年、59 歳の時のことです。松蔭大学とは、吉田松陰の松下村塾における教育実績に共鳴して名付けられた大学名なのですが、吉田松陰の研究講座はある意味でこの大学の憲法みたいなものなのです。今では必修科目になっている学部もあって、みな一生懸命勉強しています。

広報　吉田松陰の言葉で『草莽崛起（そうもうくつき）』という言葉がありますが、わかりやすく言うとどういうことですか。

長谷川　志ある民衆の結集こそが幕末の難局打開の秘策だということで、言いかえれば志のある在野の人々の中から日本を変えようと立ち上がることを呼びかけたのです。「立志と実践」ですね。

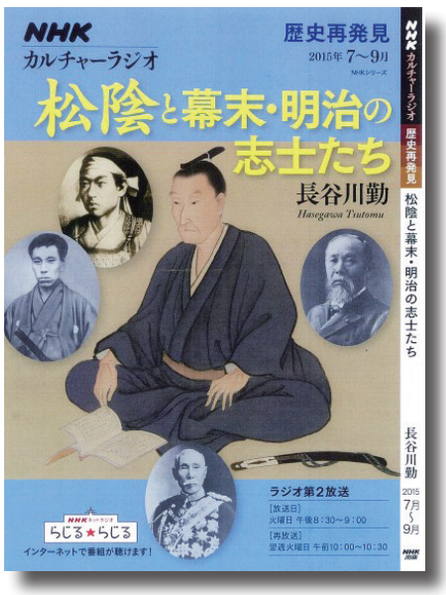
広報　アップルの創業者もやる気がなければイノベーションは起きないと言っています。

長谷川　人間は絶対に「志」を失ってはいけない。その「志の導くままに」学問した先に人生が拓けるのではないかなぁ。吉田松陰も『学問の大禁忌は作輟なり』と、学問はやったり、やらなかったりではいけないと戒めの言葉を残しています。

広報　今の学生さんや若者にその言葉を贈りたいですね。

長谷川　『志があれば道は拓ける』というのが私の座右の銘ですが、これは松陰が残した『士規七則』という教えの中にある「志を立てて万事の源となし、全ての源は志にあり」というところから戴いています。高い志をもって実践することによって素晴らしい人間の出会いが必ずあります。

広報　まだまだお聞きしたいことはたくさんありますが、この後の話は、NHK のラジオ講座「歴史再発見」と著書に譲りたいと思います。今日は、貴重なお時間とお話をありがとうございました。



《NHK カルチャーラジオ》ラジオ第 2 放送
「歴史再発見　松陰と幕末・明治の志士たち」のテキスト

株式会社ジョブウェブ　代表取締役会長

佐藤　孝治さん

コンフォートゾーンからの脱却で人は成長し変わることができる！

『がんばれ同窓生』第４回は株式会社ジョブウェブ・代表取締役会長の佐藤孝治さんからお話を伺いました。就職活動後、早稲田大学社会科学部４年生の 1996 年 10 月にジョブウェブを創設。来年 2016 年で創業 20 周年を迎えるジョブウェブは、学生・企業両方に対して就職活動の支援事業を展開しています。

今回は六本木二丁目のオフィスにて、ここでしか聞けない学生時代のお話から起業にいたった経緯、そしてこれからの展望について佐藤さんからたっぷりお話を伺いました。　（文責：下地彩子）

●きっかけは、ホットケーキとタモリさん!?

下地　改めまして、社学 2006 年卒業生の下地です。本日はよろしくお願いします。

佐藤　よろしくお願いします。

下地　早速ですが、早稲田を目指したきっかけをお聞かせいただけますか？

佐藤　え、そこからですか？（笑）。

下地　せっかく早稲田社学 OB のインタビューなのでぜひお願いします（笑）。

佐藤　この話は初めて語りますね（笑）。最初のきっかけは、幼稚園くらいのころなんです。

下地　ずいぶん早いきっかけですね。

佐藤　そうですね。僕実家が王子なんですが、王子って都電が走っていて、早稲田行きと三ノ輪行きっていうのがあるんです。幼稚園の頃に祖母が早稲田に連れて行ってくれて、早稲田駅の近くの一乃瀬っていう喫茶店でホットケーキを食べたんです。それ以来、なんとなく早稲田って身近な感覚があったんですよ。

下地　ホットケーキが始まりですか（笑）。おばあちゃんに感謝ですね。その後は大学受験もスムーズに？

佐藤　高校は普通の公立高校に通っていて、全然早稲田受かるような状況ではなかったんですが、僕は早稲田に行けるような気がしていました。当時、世の中の気になる人リストっていうのを作ってまして、この人って面白いなと思う人、変だなとかアツいなとか思う人たちをリストアップしていたんですけど、いざ並べてみると早稲田出身の人ばっかりだったんですよね。もちろん他の大学の人もいたんですけど、早稲田の人が圧倒的に多くて。タモリさんとか（笑）。あとは「バンカラ」っていうキーワードも好きでしたね。現役時代はまったくダメだったので、ワセヨビ（早稲田予備校）で浪人をして、なんとか滑り込みました。

下地　タモリさん……私も早稲田に入れば面白い人に出会える気がして目指したのでお気持ちすごくわかります（笑）。ところで、大学ではどんな学生時代を？

佐藤　映画とか映像の世界に興味を持っていて、もともと実家のビデオカメラを使って撮影したり自分で映像編集などもやっていたので、まずは初志貫徹しようと思って早稲田大学映画研究会に入りました。

下地　「ザ・早稲田生」の路線ですね（笑）。

佐藤　はい。せっかくなので大学生っぽい雰囲気も味わいたくて、テニスサークルにも入ってみました。１年の頃は両方に参加してみたりしましたが、だんだん映画研究会を中心として生活が回っていくようになりましたね。とにかく映画をたくさん見てましたし、サークルの先輩たちが撮る学生映画で撮影アシスタントや照明、役者をすることもありました。映画を作っては上映会をするっていう生活をしていました。当時の

バイト代は全部フィルム代に消えていきましたね。

下地　バイトなどもしていたんですか？

佐藤　はい、南門の高田牧舎で賄い付きのバイトを長いことしていました。社学の授業が午後からだったので、午前中に高田牧舎で朝仕込んでランチまで働いて、賄いを食べて、そこから授業に行く、みたいな生活でした。バイトのキッチンで野菜をひたすら切って、大学の授業を受けて、第二学生会館という昭和の雰囲気に満ち溢れた場所でいつも映画の議論をして、夜10時くらいに学生会館が閉まったらみんなでアリババして（馬場まで歩いて）帰る、っていうのが日課になってましたね。あとは日雇いで稼げる引越しのバイトもしてました。ペルソナプレスっていうバイト情報誌があったのですが、そこに載っていた引越しのバイトも掛け持っていたので、高田牧舎とアート引越しセンターと、映研と、テニス、っていう大学生活でした。
とにかくずっと動いてましたね。寝てる記憶があまりない。

下地　高田牧舎、ペルソナプレス、懐かしいキーワード盛りだくさんですね。ちなみに私の時代は「馬場歩き」と言っていましたが「アリババ」は初めて伺いました。各世代でいろんな呼び方がありそうですね。ところで、授業はしっかり出席していた方ですか？

佐藤　結構授業はしっかり受けてました。積極的に関わってて、難しい授業では質問とかしてましたね。終わったあとに質問して、遅い時間になるとたまにそのまま教授に飲みに連れて行ってもらうこともありました（笑）。そのほうが授業よりもわかりやすいし、気に入ってもらえるし。そうすると絶対単位落とさないんですよ（笑）。だから難解な授業ほど前の方に陣取ってしっかり授業を聞いて、終わったら質問をしていました。

下地　さすがです(笑)。ゼミも参加されていましたか？

佐藤　大学３年のゼミ選択の時に、広告論のゼミがあったので、そこで八巻俊雄先生のゼミに入って、幹事長をしていました。八巻ゼミは毎年電通の学生広告論文に出すのが恒例で、６月にお題発表があり、11月に提出をするので、大学３年はほとんどそれに費やしました。その時のテーマが「マルチメディア時代の広告」だったんです。96年当時のマルチメディアってまだCD ROMなどをメディアとして使っていました。まだインターネットはごく一部の人が使っている状況でした。ゼミの仲間たちと調べているとインターネットっていうものがあるらしいぞ、というのがわかって、僕らはインターネットをこれからのマルチメディアとして妄想する毎日でした。インターネットが今後どうなっていくのかを妄想するために、大学生でインターネットを使っている人、使っていない人に大規模にアンケートをとったりもしました。その甲斐もあって、広告論文対象の文部科学大臣賞っていうグループ部門での１位を頂いたんですよ。

下地　すごいですね。就活にうまく繋がりそうな活動ですね。

佐藤　当時の電通の成田社長とも握手をしたし、正直これは電通に受かるんだなと思いましたね（笑）。でも最終面接で落ちてしまって、アクセンチュア（当時アンダーセンコンサルティング）を受けたんです。

下地　なぜ広告ではなくコンサルに？

●佐藤孝治さんプロフィール
1972年東京都生まれ。早稲田大学社会科学部卒。
就職活動後、大学４年生の96年10月ジョブウェブを創設。
97年７月アンダーセンコンサルティング（現アクセンチュア）に入社。
99年10月ジョブウェブを法人化し代表取締役社長就任。以後、学生の就職支援と企業の採用支援を通じて、学生と企業の本音コミュニケーションをサポートしている。
2013年７月より代表取締役会長に就任。
著書に「〈就活〉廃止論（PHP出版）」「内定の原則（英治出版）」等。
公益財団法人日本ユースリーダー協会　理事
一般社団法人アスパシ教育基金　理事
・**Jobweb**〈http://company.jobweb.jp/〉
・**AJITORA**〈http://ajitora.jobweb.jp/〉
・**sfirm**〈http://sfirm.jp/〉

佐藤　当時、慶応大学の友達がアンダーセンコンサルティングに受かったという報告をしにうちに来て、そのパンフレットに「変革」って書いてあったんです。そこに「マルチメディア」という言葉もあって、「マルチメディア」「変革」これは俺だなと思いましたね（笑）。面接でもインターネット革命についてひたすら熱く語ったら受かっちゃったという感じでした（笑）。

●インターネット上に「場」をつくることから始まった

下地　就職は決まったものの、ジョブウェブ自体も学生時代から起業されてたんでよね？

佐藤　起業というより、４年生で内定が決まったあとにインターネットを使って新しいメディアを作るみたいなことをしたいなと思って。大学４年の夏に仲間とジョブウェブを立ち上げました。電通を見返したい気持ちもあったんですよね（笑）。ちょうど就活中に学生同士がメーリングリストを使って繋がって、情報共有をし始めるような動きが始まっていて、まさに「インターネット元年」という感じでした。これを学生同士をつなげるコミュニティーを作ったらより良い就活の環境が作れるんじゃないかなと思ったのがきっかけです。立ち上げ当初は身近な感じで、後輩たちにも「こんなの作ったから入ってよ！」って勧誘とかしてました。ある種早稲田にインキュベートしてもらったような感じでしたね。

下地　最初のころはどんなことをしていたんですか？

佐藤　最初にやったのは、就活をしている人同士がお互い情報を発信できる仕組みを作りました。メーリングリスト（ML）という仕組みを使って、例えばコンサル業界に興味がある人グループ2000人とか、今で言うFacebookグループとかLINEのグループとかみたいなものです。就活っていうカテゴリーで１万人くらいの学生が参加してて。商社とかマスコミとか、全体のジェネラルグループとか、いろんなコミュニティーがあって、１日100万通くらいのメールが流れてた時代もありました。それを大学生の内定者世代の仲間で運営してたんですよね。

下地　すごい規模ですね。

佐藤　はい。これは面白いなぁと思いました。こういうものを思いついて作って、評価して期待してくれている人がいるっていうのは嬉しいものですよね。

下地　学生時代に立ち上げたジョブウェブのサービスですが、もともとビジネスにするつもりだったんですか？

佐藤　スタートはビジネスにするというところからは始まってないですね。インターネットを使って面白いことをしたいという動機と、自分の経験からも就職っていろいろ大変だったから、大人に対する学生運動のような思いがありました。大人は本当の事言ってない

んじゃないかとか、もっと学生がネットワーキングをすると企業もしっかり対応せざるをえないんじゃないかとか。「企業に対して学生がネットワーキングをしてパワーを持って対等な関係にしよう」みたいな気持ちがありました。あとは、電通に落ちてしまった事から生まれる悔しさのパワーもあったかもしれません(笑)。やっているうちに、みんなが使ってくれて嬉しいし、感謝されたりするうちに引くに引けなくなってきて。当時悩んだのは、ジョブウェブって中身は何もなくて、みんなが参加して書いてくれるから価値があるわけで、それに対してお金を取るってどうやればいいのか当時はわからなくて。ビジネス化する方法がわからなかったんですよね。

下地　今で言うCGM（Consumer Generated Media）ですよね。

佐藤　そうですね。みんなの思いが詰まっているものだから大切にしなきゃいけないという思いもあったし、でもサーバー運用費とかいろいろお金はかかってきちゃうので、長く継続していいものにしていくためには、お金が回らないとダメだなと。ジョブウェブのコミュニティーを生かして、ちゃんと運営しているスタッフが生きられるようにするにはどうしたらいいのかと、バナー広告などをやってみたりして、マネタイズをし始めたときに会社化をしました。

下地　会社化してからは、最初からうまくいったんですか？

佐藤　ビジネス化の方向性を考えたときに、ジョブウェブを使っている学生さんは優秀な人が多かったので、そこに関わりを持ちたい企業もいるはずだという発想で、そういう会社さんから協賛金を募ることを思いつきました。ただ、最初は広告を売り歩いたのですが全く売れず、結局学生が本当はどんなことを考えているか求めているか、学生を代表して本音を伝えていく、ということをするようになったら、企業がすごく興味を持ってくれて……。一緒になって価値あるインターンシップの企画を考えるとか、会社説明会のアドバイスをしたりとか、企業の人事の仕事を一緒にやるような感じです。あくまで視点は学生にとって価値のあるものにするというところで考えていたら、それだったらお金出してもいいよ、という企業が出てきました。

下地　企業へのアプローチも、学生が集まる「場」であり、学生の本音を知っているジョブウェブの強みに立ち返ってうまく回りだしたという感じなんですかね。

佐藤　そうですね。それまでは説明会に来た学生をだんだんとふるいにかけていくような採用プロセスが多かったのですが、そのプロセスで学生を成長してもらおう、という気概はほとんどなかったと思うんですね。もっと企業がもっているノウハウとかリソースを使って、例えばマーケティングや営業について教えてあげるみたいな、いわゆるビジネススクールのようなものを学生に提供してあげるのはいいんじゃないかと考えて、企業に提案をして歩いたらすごくうまくいくようになって。DeNAの南場さんがロジカルシンキングの講義をやるというと、たくさん学生さんが聞きにきてくれたこともありました。学生は学ぶ機会に参加をして、企業は優秀な学生さんに出会えるので、そこでご縁ができて採用にもつながる、みたいな仕組みができてきました。そうこうしているうちに企業側から年間使用料という形でお金をいただける仕組みが出来上がっていきました。

下地　最近の企業向けのサービスではどのようなことを？

佐藤　本当に採用で会社の将来を担うような人材を採用したいと思ったときに、どういう風に学生と向き合ったらよりよい人材を採用できるのかについて、企業と一緒になって考えることをしています。経営者の方や企業の人事の方からよくご相談をいただきます。そもそもどういう人材が必要なのかについて、細かく話しながら一緒に見つけていくような感じですね。いま、一番力を入れているのが、3ヶ月でその会社の新卒採用の変革をやり切るコンサルティングです。社員さん、内定者などにヒヤリングをして、会社の魅力の棚卸しをした上で、具体的にどのような施策をすればいいのかを企画します。そして、その中の1つの施策を実際に実行するまでやり切ります。

下地　まさに採用コンサルですね。採りたい人物像が固まってきたらどうするんですか？

佐藤　こんな行動している学生があってそうだなというのが見えてきたら、ジョブウェブのプロフィールから検索して数十名に絞り込んで、実際にあってみようという話になります。ジョブウェブにはいろいろはサービスがあるので、企業ごとにどのように活用してもらえるかについても一緒に考えていきます。

下地　採用活動だけでなく、インターンや採用プロセ

Jobweb〈http://company.jobweb.jp/〉

AJITORA〈http://ajitora.jobweb.jp/〉

スについてのアドバイスもされているんですか？

佐藤　セミナーやワークショップって、イケてないと時間の無駄じゃないですか。学生にとっては成長機会にならないし、企業にとってもアピールにならないので。やっぱりみんながわくわくして学べるようなものを作ったほうがいいので、今までの経験を生かして担当者の方とお話させていただいています。

●生々しい就活の今を知っていることが強み

下地　学生・企業両方に向けてサービスを展開する利点もありますか？

佐藤　学生に対してだけキャリア支援をしていてもなかなか採用の内部がどうなっているのかは見えないんですよね。でも企業の人事部の方といろいろと話をすることで、選考基準とか面接の現場とか、生々しい現実を見ることでわかることも多くて。そうすると、企業に対しては、学生のニーズや本音を伝えられるし、学生に対しては、企業はこういうところを見ているからもっとこういう風に頑張っほうがいいよ、というアドバイスができるようになってきました。本当に学生のことを思ったら、企業の懐にも踏み込んだ方がいいなと実感しています。

下地　ジョブウェブならではのサイクルですね。採用は年々変化していますか？

佐藤　そうですね。今までの大量に集めてふるいにかけていくという一括採用の枠組みがうまくいかなくなってきているんですよ。学生も、いろんな動きをしているので、動き出す時期も違えば、多様な機会もあるので。どちらかというと、学生とずーっと接点を持ち続けていって、きちんとファンになっていってもらうことが大事になってきてますね。しかるべき情報をきちんと公開したり、セミナーで学生と直接会ったりして、徐々に距離を縮めていって、最後にこの人に入って欲しい、みたいな感じです。今まではそういう関係性作りをしないで、説明会をしただけで3000名から30人にしぼって、みたいなプロセスだったんですよね。そこがだいぶ新しい時代の採用のあり方に変わってきているところですね。インターネットの普及も相まってだいぶやりやすくはなってきていると思います。

下地　最近のジョブウェブの学生向けのサービスはどのようなものがあるのでしょうか？

佐藤　人と人、人と機会をつなげていこう、ということで将来学生が社会に出るタイミングでの問題を解決していきたいという思いで、jobweb.jp とうサイトを運営しています。そこには無料で参加できて、自分のプロフィールを作ったり、ブログを書いたりなどができます。そうするといろんな人が注目して、フォローされたり、いいねしてもらえたりとか。そこでは学生同士も繋がれるし、それを見ている企業の方とも繋がれる。普段だと出会えないような人と出会えて、繋がれるという仕掛けをベースにしています。また、AJITORA（アジトラ）という世界22ヵ国140箇所でインターンが出来る仕組みや、sfirm（エスファーム）というベンチャー企業でのインターンが出来る仕組みを作っています。その他、ITのスキルアップのためのゼロから始めるプログラミング講座、というものもやっていて、そこは全くプログラミングができない子が参加をするとWEB page作れたり、PHPでレンダリングしたりとかできるようになります。すでに卒業生は1000人を超えていて、技を身につけた人がIT業界で今活躍されています。

下地　幅広い事業を展開しているんですね。

佐藤　ジョブウェブに参加すると、その人が持っているポテンシャルを最大限に発揮できるようにするための仲間ができたり、企業が見つかったりする。そんな場を提供していきたいと思っています。

下地　現在どのくらいの会員数がいるんですか？

sfirm〈http://sfirm.jp/〉

佐藤　一世代 14,000 人くらいの会員がいます。

下地　すごい規模ですね。でも毎年会員がリフレッシュされてしまうんですよね？

佐藤　そこが大変なんです（笑）。社会人になっても使い続けられるような価値を提供できるサービスにしていきたいなとは思っています。

下地　いままで一番大変だったことはなんですか？

佐藤　いろいろとありすぎますね（苦笑）。ここで話せることで言うと……例えば先程紹介したアジトラという海外インターンのサービス。タンザニアでわくわく動物ランドみたいな動物番組を作るようなスタッフの仕事とか、ベトナムで日本人向けのフリーペーパーを売り込む営業の仕事とかもやっていたりするんです。そうすると、世界中で問題が起こるんですね。インドで洗面台で洗濯していたら洗面台の陶器ごと底が抜けちゃったことがあって、そのまま陶器が足の上に落ちて大怪我をしたりとか。アフリカで身ぐるみ剥がされて車に乗せられた、とか。今となっては命が無事でよかったねと話せますが、毎回本当に肝を冷やします。世界中で起こる災害にも敏感になって、フィリピンで水害があったときに誰かいってないっけ？　とか、飛行機が落ちたら誰か乗ってない!?　とか、とにかくいつも気になるようになりました。もちろんプロテクションサービスをつけて安全の案内をしています。

下地　そこまでリスクを犯してもサービスを続ける理由は、やはり行って帰ってきた学生さんたちの反応にあるのでしょうか？

佐藤　おっしゃる通りです。やはりコンフォートゾーンを抜け出してチャレンジすることで人は成長するし変わるんです。だからそういう機会をどんどん作っていこう、ということで続けています。

下地　逆に、嬉しかったことはどんなことでしょう？

佐藤　社会に出て活躍している報告を聞くと、やっぱり嬉しいですね。ジョブウェブを通じて就職した方が子会社の社長になったりとかしてたりすることもあるんですよね。ニュース見てたら知ってる名前が出てきて、調べてみたら過去にメールのやりとりをしていたりとか。おめでとうございます、と連絡してみると、京都のセミナーに出てくれていた方だったりとか。ジョブウェブの勉強会で出会って私たちは結婚しました、という報告があったりとかするのもとても嬉しいですね。あと、企業側に対しても、ジョブウェブを通じていい人を採用できて会社がどんどんよくなっていく、というところも近くで見させて頂いていて、それもすごく嬉しいなと思ってます。

下地　ジョブウェブの今後の展望をお聞かせください。

佐藤　これまでの新卒採用のパラダイムが、新卒一括採用という大量に集めてふるいにかけていく方式が一般的だったことから、一人一人とのつながりを丁寧に、向き合って行って、学生の成長に企業側が貢献するのが当たり前の世の中になるように、ジョブウェブを通じて貢献していきたいと思っています。

下地　それでは最後に、普段学生と向き合っている佐藤さんから、現役の学生さんたちにひとことお願いします。

佐藤　基本的に先輩方は若い子に話しかけられるとそれだけで嬉しくなっちゃんですよね。だから、先輩にどんどん自分から話しかけていってほしいですね。萎縮してしまわずに、学生時代にどんなことをしていて、今何をしているのか、そんなことをいろいろ聞くことで自分のキャリア形成の参考になるし、先輩たちって聞かれると嬉しくてどんどん話してくれるはずなので（笑）。とにかく関わりをたくさんもって、話をしていってください。あとは、もし自分でこんなことしたい、とか志を見つけたら、先輩たちにその思いをぶつけてみてほしいですね。そうすると、じゃあこうしてみたら？　とか、こういうサポートならしてあげられるよ、というアドバイスを頂けたりします。僕もジョブウェブを立ち上げた時にサーバーを貸してもらったりしたんですが、やはり 10 歳以上年上の先輩だったりするんですよね。そういう人たちと関わって、どんどん話していってほしいですね。

下地　本日はお忙しい中ありがとうございました！これからのご活躍にも期待しています！

佐藤　ありがとうございました。

ゼミリレー⑰
池田　雅之 ゼミ

上江洲 慎
（平成 18 年卒）

研究と社会貢献の両立を目指して
―大学と地域を結ぶ「教育ボランティア」の実践

●比較基層文化論からグローカロジーへ

私がゼミの門を叩いた時、池田ゼミは変革期を迎えていた。池田雅之先生の専門は英文学。大ヒットミュージカルの原典となったTSエリオット「キャッツ」の翻訳や小泉八雲（ラフカディオハーン）の研究者として、多くの実績を残されていた。タイ王立タマサート大学客員研究員を経て、専門領域を世界の基層文化の比較研究に広げ、ケルトやアイヌ、沖縄など、マイノリティとされてきた文化に関する論考を深め、『共生と循環のコスモロジー』を編著した。沖縄出身の私は同書とゼミのシラバスに魅了され、池田ゼミの門を叩いた。2003 年のことだった。

早稲田大学で沖縄の文化研究が出来る、と思っていたが、結果的にはそれよりも違うことに熱を上げることとなった。「鎌倉てらこや」のスタートが、その後の私の人生を大きく左右する契機となったのだ。「鎌倉てらこや」は「現代版の寺子屋」を創り、地域教育を再興するプロジェクト。池田先生が、このような教育ボランティア活動に取り組み始めたのは、「研究」「教育」の他に、大学は「社会貢献」をするべきだ、と考えたから。また、当時の早稲田大学は、「グローカル・ユニバーシティ」を第二の建学精神として掲げており、Think Globally Act locally（地球規模で思考し、地域に根ざした活動を行う）を実践する機運が高まっていた。これまでの先輩方も、フィールドワークやシンポジウム等の開催を通して、実践的に学んでおられたが、「鎌倉てらこや」の立ち上げによって、池田ゼミは新しい地域文化を創っていく“主体者”になったのであった。

率直に言うと、この変革に戸惑う学生は少なくなかった。「私は比較文化研究がやりたくてこのゼミに入ったのに、課外活動がメインになってしまって……」という想いを抱える学生と、「鎌倉てらこや」の活動に積極的に関わる学生の間で、ゼミ運営をどのように行うか、何度も議論を重ねた。池田先生の方針はもちろん、研究と社会貢献の「両立」。私たちゼミ生は両立の形を模索し続けたが、時計の針が逆に戻ることは無かった。池田先生は本気だった。自宅を鎌倉に引っ越してまで「てらこや活動」に心血を注ぐ、先生の静かな行動力に私たちはリードされていたのだと思う。

●地域と大学を結ぶ「鎌倉てらこや」

さて、私たち池田ゼミは、社会に対してどんな価値を生み出すことができたのだろう？　「鎌倉てらこや」の足跡を振返ってみたい。発足の目的は「不登校引きこもりを未然に防ぐこと」だった。なぜ、不登校引きこもり問題にフォーカスをあてたのか？　それは創設者である森下一先生にルーツがある。森下先生は不登校引きこもりを専門とする精神科医。1989 年には当時日本で初めて文部省の認可がとれる不登校児のための学校、『生野学園』設立し、これまで約 3,000 名の子どもたちを自立に導いて来た。2000 年以降の森下先生の新たな問題意識は、不登校引きこもりの対処療法だけでなく、予防策を構築することだった。その手がかりとして、日本の民俗的教育システムに着目し、地域社会の中で子どもたちを育てる現代版の「てらこや」の設立を提唱されていた。森下先生の問いかけに共鳴した池田先生と鎌倉の寺社仏閣、青年会議所のメンバーが力をあわせ「鎌倉てらこや実行委員会」を立ち上げた。なぜ、池田先生が元来の専門外である子どもの教育にコミットすることになったのか？　そこには、池田先生の研究生活に加え、ひとりの市民として「問い」があったように思う。自身で翻訳した『自分の人生に出会うための言葉　ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの人生訓』（マーク・フォステイター）の言葉「自分育てと自分直し」を自らの人生哲学として、学生に説いていた。果たして自分は「良き市民、良き親としての役目を全うしてこられたのだろうか？」「自分自身が

自分を育てながら、自分を直していく必要があるのではないだろうか？」という問いが、ボランティア活動に取り組む原点にあったのだろう。

「鎌倉てらこや」の最大の特徴は、大学生のボランティアが子どもたちのお兄さんお姉さんとして活躍する点にある。子どもたちにとって大学生は、一緒に思いっきり遊んでくれるパートナーであり、甘えられる支えであり、憧れを抱く存在である。池田ゼミの学生は代々にわたり、プログラムを企画、運営し、子どもたちと本気で向き合ってきた。中には、将来「早稲田大学に入りたい」「てらこやのスタッフになりたい」と言う子どもがいて、学習の動機付けやロールモデルとして大きな存在感を残してきた。

一方、大学生にとっても、歴史あるお寺での合宿や、会社経営を行う青年実業家との協働を通して、地域文化や社会システムを実践的に学ぶ貴重な機会となった。

鎌倉という地域の立場から見ると、早稲田大学の学生という『よそ者、若者、バカ者』が関わることは、地域活性化に新しい風を吹き込む存在として、喜ばしい存在だった。

教育ボランティアを通した「地域と大学の連携」の実績で、社会的にも大きな評価を得た。2007 年には公益財団法人博報児童教育振興会より博報賞ならびに文部科学大臣奨励賞を、2011 年には財団法人全国青少年教化協議会より正力松太郎賞を受賞した。2007 年に NPO 法人格を取得してからは、池田ゼミの枠組みを越え、社会的ミッションを担うようになった。

初代理事長には池田先生が着任され、大学教授と NPO の理事長の二足の草鞋を履いて、大学生をひっぱってこられた。

●池田ゼミに脈々と受けつがれるもの

池田ゼミのゼミ誌のタイトルは『宴』だ。このネーミングが示す通り、飲食を共にし、議論を交わすのが好きなメンバーが多かった。行きつけは、キャンパス近くの韓国料理店『ニューエコー』だった。おきまりのメニューとなった「チャプチェ」「海鮮チヂミ」「参鶏湯」は、「いつもの！」の一言で注文が通った。忘れてはならないのが、池田先生のご夫人、季実子さんの存在だ。江戸っ子気質で、まるで学生たちのお母さんのように、人生相談から食事の世話までチャキチャキとこなした。むしろ、ご本人が一番楽しんでいるようにも見えた。池田ゼミを一言であらわすとしたら、『アットホーム』であろう。池田先生の穏やかな雰囲気を基調としつつ、毎年入れ替わる学生のキャラクターによって、世代世代の色が出たが、和やかな空気感は不変だったと思う。

池田先生のリーダーシップはトップダウンや鼓舞型ではなく、学生の主体性を尊重し、受け止める受容型だった。ただしそれは、放任ではなく、コーディネートを基調としていた。ゼミにはよく、社会で活躍するゲストが登場した。ジャーナリスト、宗教者、アナウンサー、映画監督、音楽家、会社経営者、精神科医、俳優等々、ジャンルを問わず社会の一線で活躍する人の刺激的な話を聞く機会が多くあった。その影響あってか、卒業生の進路は、研究者、会社経営者、女優、スポーツ選手、公務員、会社員、主婦、NPO 職員等、多岐にわたっている。

文化を学ぶだけでなく、新しい地域文化を創造するゼミに巡り会えたことで、私のキャリアは拓かれた。2014 年度からは、NPO 法人鎌倉てらこやの理事長職を池田先生より引き継がせて頂いている。

人材系の会社に勤めながらではあるが、多くの大学生たちと一緒に地域活動に携わることができ、「自分育てと自分直し」の貴重な機会を頂いていることに感謝の念が耐えない。それぞれの分野で歩みを続けるゼミの仲間たち。現在の道は違えど、たまには、戻ってきて共に宴をあげたくなる心情を育んでくれた池田ゼミの文化を誇りに思う。

●上江洲　愼さんプロフィール
1982 年沖縄県生まれ。2002 年早稲田大学社会科学部入学。
2010 年早稲田大学大学院社会科学研究科にて修士号取得。
【現職】
特定非営利活動法人鎌倉てらこや理事長
特定非営利活動法人全国てらこやネットワーク専務理事
鎌倉市子ども若者育成推進協議会副会長
株式会社リクルートキャリア CV 社員

「社撮(シャトル)写真倶楽部」第２回写真撮影会の報告

プロ写真家のアドバイスで「スカイツリー」の夜景を撮る！

社学稲門会の写真サークルである「社撮（シャトル）写真倶楽部」の第２回写真撮影会が２月７日に開催されました。テーマは、「東京スカイツリーの夜景を撮る」。

当日は、亀戸駅に集合し、まずは、プロ写真家である岡本先輩（1982 年社学卒）から、写真の撮り方についてレクチャー。「三分割法」などの写真の「構図」、スナップ撮影のポイント、夜景の撮り方などについて、岡本先輩が実際に撮った写真をもとに分かりやすく説明いただきました。特に、「三分割法」は、今回の撮影会だけでなく、スマホなどでする日常の何気ない写真撮影にもすぐに応用できそう！

レクチャー後は、スカイツリー撮影のベストポジションに場所を移動して、撮影会開始。早速、その場で岡本先輩から教えてもらった構図やポイントを意識して撮影をし、さらに、その場でも岡本先輩からアドバイス。

撮影会終了後は、本所吾妻橋の超人気店「もつ焼・稲垣」で懇親会（吉田先輩オススメのお店です）。懇親会から参加のメンバーも加わり、さらには、吉田先輩のお嬢様も参加いただき、大人数での楽しい会となりました。

社撮写真倶楽部は、初心者大歓迎のサークルで、参加者が使うカメラもコンパクトデジカメ、ミラーレスカメラ、一眼レフ、さらにはスマホと様々、それぞれのカメラに合わせて、プロ写真家の岡本先輩が丁寧に指導をしてもらうことができますので、ぜひみなさま次回の撮影会にも御参加ください。

東京スカイツリーをバックに記念撮影

写撮倶楽部の面々と撮影会後に懇親会を

稲垣　里帆
２年生 / 東京都市大学等々力高等学校

これまでの大学生活を振り返って

●自己紹介とご挨拶

はじめまして、社会科学部２年の稲垣里帆と申します。この度は、皆様のご厚意とご尽力により、社会科学部卒業生奨学金をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

二人の姉妹もおり母子家庭の我が家にとって、私立大学に通う負担はかなりのものでした。しかしながら、私の将来に期待と希望を託してくれた母の決意と皆様方の寄付により、早稲田の門を日々くぐることが可能となっています。重ね重ね感謝申し上げます。

キャンパス内の人の多さや広さにおろおろ・ドキドキしていた１年前の自分を振り返ると懐かしく感じ、今では自分の庭のように過ごしており時の流れの速さを実感しています。社会科学部には多様な選択肢の中から自ら主体的に選択する姿勢も身に付き、現在は社会調査士の資格をとるための授業を中心に履修しています。

春学期から政策科学の上沼ゼミが始まり政策について勉強しつつ、個人研究に勤しみました。自分の興味のあるテーマを突き詰められる貴重な時間を過ごしました。また先輩や同輩の研究テーマや内容は多様で面白く、切磋琢磨できる仲間との出会いによりさらに充実した学生生活になりました。

●うちこめることを発見

サークル活動では早稲田最大の環境サークルである「環境ロドリゲス」に所属し、自然を活かした地域活性を理念として活動しています。佐渡島の魅力を実際に体験してもらうことでPRするという目的で、全国の大学生向けに佐渡旅という５

日間の合宿形式のツアーを計画し運営しています。観光名所をまわるようなふつうの旅ではなく、集落に入り地域の方と交流を深めたり、地域の特色を生かした体験をします。サークルメンバーはある地域の方々と密な連絡を取り交渉し、佐渡で過ごす５日間が最高に楽しいと思えるような体験を考えることに頭をひねっています。

私が初めて佐渡に行った際にもっとも感動したのは景色の美しさでした。穏やかで澄んだ海やしっとりと神秘を感じさせる天然杉、長い歴史をもつ棚田など、素晴らしい景色が数えきれないほどありました。そこでしか見られない景色というのは、自然が本来もつ価値であり、そのことの素晴らしさに気づかされました。

そんな貴重な自然がなくなっていくことに深い悲しみを感じ、自然を守るために自分にできることは何かを考えるきっかけになりました。これが私の大学生活において貫こうとしている軸となっ

ています。幼いころから木登りが得意だったり、虫とあそぶのが好きだったりするのを思い出すと、本当に自分が好きなものを発見できたような気がします。

●周りの支えに感謝

せっかく夢の早稲田に来たのだから、いろんなことをやりたいと思い幼いころからあこがれていた早稲田交響楽団に入団しました。音楽にあまり関わることのなかったわたしにとって、クラシックの世界は大きな挑戦です。

始めたものの普段の練習についていくのもやっとで、アルバイトや勉学との兼ね合いのなかで練習時間を確保することも大変でした。あきらめそうになったことも多々ありますが、奨学生に選ばれたことが経済的・精神的な支えとなりました。

また、演奏会に足を運んでくれる友人や親せき、稲門会の方々の声が大変励みになっています。さらには社学奨学生の先輩がワセオケにもいたと知り、私と同じような環境で頑張っている先輩の存在も心強いものでした。常に気にかけてくださる先輩に支えられながら、信頼できる同期とも日々励まし合い切磋琢磨してきました。そんな仲間がいなければなしえなかったことが多々あり、思いやりにあふれた人たちに支えられていた１年だったと気づき、感謝でいっぱいです。自分自身もサークル活動に限らず様々な場面で、より一層誰かの支えとなれるよう頑張りたいです。

●奨学生として

このように勉学に励みながらも課外活動に没頭できるのはたくさんの方々の支えがあってこそだと感じております。経済的理由でたくさんのことをあきらめなければいけない学生が多くいる中で社会科学部卒業生奨学金に選出いただいたことに、感謝だけでなく責任も感じております。

その御恩に報い、また責任を果たすため卒業後は後輩への支援をしたく思っております。

この社会科学部奨学金をきっかけに様々な分野で頑張っている同期や先輩に出会うことができ、

交流する中で刺激をうけました。さらに社会でご活躍する卒業生の方のお話を聞く機会にも恵まれ、身になるお話を聞けるだけでなく早稲田や社学の伝統を肌で実感できました。新たな縁に嬉しく思うと同時に今後もこの縁を大切にしていきたいです。また、このような幸せな状況をのちの代に還元できるよう、４年間の大学生活を最大限に生かして社会に貢献できるよう精進してまいりたいと思います。

最後になりましたが、社会科学部奨学金の運営や管理、ご支援くださった皆様、またこれまでお世話になった方々に改めて心より御礼申し上げます。

●稲垣里帆さんプロフィール

現在大学２年で、自然がほどよく残る横浜で 19 年間過ごしてきました。ゼミナールは政策科学の上沼ゼミに所属し、春学期間は研究のための基礎技能を身に着けながら研究課題に勤しみました。課外活動では「環境 NPO 環境ロドリゲス」と「早稲田大学交響楽団」という両者まったく異なる組織に所属し充実した日々を送っています。

奨学生紹介

西尾　妃南子
４年生 / 県立越谷北高等学校

早稲田大学で迎えた人生の転機

●１年間アルバイトで入学金の準備を

私はこの早稲田大学に入学するために、高校卒業後からまる１年かかりました。

私の家庭の経済状況は一般家庭よりも厳しく、同じような状況にある中学校時代の同級生は皆高校卒業後すぐに就職しており、就職率の極めて低い進学校に入学していたのは私を含めごく僅かでした。しかしそういった家庭の状況など今まで一度も考えたことのなかった私は入学以降部活に明け暮れ、２年生の後半、進路決定の時期になってようやく自分にとって大学進学が当たり前ではないと気がついたのです。そこで初めて私は自分の不鮮明な人生に対する焦りと責任を感じ、将来について考え始めました。

考えを整理した結果、やはり家計的に大学進学は厳しいこと、しかし一方で自分の得意なこと、やりたいと思えることも大学にあるということがはっきりしました。その事実自体に目新しいことは何もありませんでしたが、自分自身とその周りの環境について納得のいくまで考え尽くして出した結果であった為、事実を受け入れ、次の行動に移るまでが非常にスムーズであり、１年間アルバイトをして資金を準備しつつ入試勉強をするという計画に至ったときも特に不安はありませんでした。

●自力で自分の居場所を築くこと

しかしいざ実行に移す段階になると、想定範囲の内外で問題が生じました。自分で生活をコントロールしつつ独学で勉強を進めるのが容易ではないということは想定済みでしたが、人生初のアルバイトにおいて予想以上に高い壁にぶつかりました。

今までの人生で関わりを持ったことのない人達の中で時間を過ごしつつお金を稼ぐということにカルチャーショックのようなものを受けてしまい、業務の内容と環境の双方において慣れるまでに時間がかかりました。

以前の私は自分の存在を社会という大きな枠組みの中で捉えたことがなく、居場所というものは自分で作らねばならないということ、そしてそれが簡単ではないということを痛感したのです。この気付きは約半年後、早稲田大学に入学した後の自身の活動に大きな影響を与えました。

●社会的価値を培いたいという夢

高校卒業から１年間をそのように過ごした後、無事この社会科学部に入学することが叶いました。新入生として今後の大学生活について説明を受けているとき、私は再び自分の将来について計画を立てる必要があると感じました。

私が入学前に準備することができたのは受験の際にかかる費用のみであり、学費自体は日本学生支援機構と、そして早稲田大学の卒業生の方々の寄付金からなる給付型の奨学金によって賄わせていただいていました。

自分のこの学生生活は様々な支援から成り立っているのだという重みと入学前に経験した１年間は、この４年間をどう過ごし卒業後につなげてゆくかを私に考えさせるには十分すぎるほどであり、その結果、卒業後、仕事を通じ社会になんらかの形を残したい、社会へ与える影響の一端を担うことのできるような価値を培いたいという夢を抱くに至りました。

自分自身に市場的価値を持ち、国内外を問わず様々な人と関わり合いながら職務を達成する。自

分の未来像という目標ができた今、その為の学生生活における時間とお金の投資に関する計画の設定が必要になりましたが、同様の作業を去年に経験していたため、さほど迷いなく考えを進め、在学中の自費留学を決意しました。

●イギリス・ボーンマスへの短期自費留学

勿論計画の実行は容易ではありませんでした。奨学金はすでに学費として利用しているため全費用を自身で工面することは決定しています。経費削減のため仲介会社等は利用せず、航空機を含め語学学校や滞在先まで自身で直接相手に連絡を取って手配しました。

それだけでも初めてづくしのことであり十分な挑戦でしたが、何よりお金がない状況で本当に海外へ行く意味はあるのか、などと自分の設定した目標に対して自身で問い続けなければならなかったことが最も困難でした。

留学地はイギリスのボーンマスという海に面した地域であり、ロンドン程忙しくはなく緩やかに時間の流れる街でした。結果として、この留学は大成功でした。長期休暇を利用した非常に短い滞在期間ではありましたが、この目標のための準備期間が私のモチベーションを高く維持する要因となり、渡航前に準備した内容のアウトプットと現地でのインプットの効率を非常に高めてくれました。

語学学校で出会った日本人は私よりも滞在期間を長く設定している生徒が殆どでしたが、帰国する時にはそれでも滞在期間中の成長と時間の密度は誰にも負けていないという自負が自分の中に生まれていました。

私はこの留学を主として、大学進学を決めて以来、すべて自分の意思と選択で行動してきました。自分の意のままの行動は自由ですが、そのぶん実現までの資本・計画・結果はすべて自己責任です。

リスクも全て自分で背負うことにはなりますが、計画実行までの長期間にモチベーションを高く保ち続けることができ、かつ成功・失敗問わず何かを得ることができるのは、言い訳の利かない自己責任であるからと考えています。

●チャンスを与える側への希望と家族への感謝

私は高校生から社会人への過渡期を早稲田大学ですごし、これらの気づきを得ることができました。入学前に経験した１年間において私の目標として不動に位置し、迷いそうになる軌道を修正してくれたのは早稲田大学であり、入学後新たな目標に向かって邁進することができたのも、この大学には学生個々人の活動を支援する体制が整っていたからです。

４年間の学生生活を送った今、私の早稲田大学に対する印象は、単純な垂直型に上から与えられたことを学生全体が享受する、というのではなく、自分で学びたいことを見つけ自分から受け取りに行く、ということを学内で実現できる場所、というものです。

私は卒業を間近に控えておりますが、この時間を無駄にせず自分の目標に向かって邁進し、そしてできれば、今度は自分が奨学生にチャンスを与える側に立ちたいと考えています。

最後になりますが、私を 23 年間支え続けてくれた家族に感謝の念を捧げたいと思います。何も考えず楽しんでいた高校生の時も、社会的に見れば何も持たずまた何者でもなかった浪人生の時も、そして自分の目標にのみ集中していたこの４年間も、すべて許容し私を支えてくれました。

１年間浪人してようやく理解したことですが、需要と供給の輪から外れて居場所を提供してくれる家族というのは、一社会人として世の中に出た後も本当に特別なものです。

時間はかかってしまいましたが、気づいたつながりの大切さを忘れず、いつか報いることのできるよう努力します。

●西尾妃南子さんプロフィール

1992 年８月６日生まれ。O 型。
早稲田大学社会科学部４年
2012 年入学
2016 年卒業見込み
有馬哲夫教授　マスメディア研究ゼミナール所属
埼玉県春日部市出身
埼玉県立越谷北高等学校卒業
中学、高校時代は女子バレーボール部に所属
趣味：読書、映画鑑賞、スポーツ全般、食べ歩き
映画は親の影響で小さい頃から常に身近であり、自分の知らないことを教えてくれる先生のような存在でした。一時期は本気で映画関係の就職を考えており、脚本や映像の勉強をしていたこともありました。

奨学生紹介

勝村　将司
３年生 / 私立早稲田実業高等学校

大学生活について

●母への親孝行とワセダへの恩返しを

この度は社会科学部卒業生奨学金受給者として選んでいただきまして、大変ありがたく思っております。社会科学部３年在籍の勝村将司と申します。

私は母子家庭で育てられてきたため、この早稲田大学へ通うということは経済的にもとても苦しいものでした。そのような私が、稲門会の皆様の御厚意のおかげで、このように充実した大学生活を送れているという事を、この場をお借りしまして深くお礼を申し上げます。

大学生活も半分を過ぎ、終盤に差し掛かっていますが、卒業しても後悔しないように全力で今を謳歌しています。その中でも確実に将来へと繋げるためにできることも着々と進めています。そういった中でも、「将来も早稲田との深い繋がりを持ちたい」と考えていた私にとって、稲門会は素晴らしいものでした。

今の私が早稲田のために出来ることは、そう多くはありません。しかし、この度、稲門会の皆様の御厚意でいただいた奨学金のように、卒業してから早稲田のためにできることは山ほどあります。卒業してから、母親への親孝行と同時に、早稲田への恩返しをしていきたいと考え、そのためにも今からできることは全力で後悔のないように取り組んでいこうと思います。

●サークルでのアメフトとアルバイト生活

私は早稲田大学系属早稲田実業学校からこの早稲田大学へと入学してきました。高校までは理系を専攻で学んできていたため、社会科学部で学ぶことはとても新鮮で、学問に対してより一層励むきっかけになりました。

また、早稲田実業からの内部進学ということもあり、交友関係には恵まれており、ゼミナールやサークル活動などでも仲間同士で切磋琢磨していける、そのような充実した生活を送らせていただいております。

私は中学校の頃から今までアメリカンフットボールを続けてきました。私はディフェンスのタックルやブロックを専門としているLB（ラインバッカー）というポジションを中心にやっています。

これは他のポジションに比べても、怪我が多くなりがちなポジションであり、私自身も高校時代から怪我が絶えませんでした。そのような面で親にはたくさん迷惑・心配をかけてきてしまい、金銭的にも負担をかけてきました。

大学に入ってからはサークルとしてアメリカンフットボールを続け、それに並行してバイトもするようになりました。そうして、極力、金銭面での親の負担を減らせるように、と努力をしてきました。

「サークル」というと部活と比べ、練習も少なく和やかな印象を抱きやすいですが、私の所属しているサークルは大学公認ということもあり、練習も多く、リーグ戦優勝を目指し、日々チームメイ

ト同士で切磋琢磨しています。

●公務員を目指し試験勉強を

私の、将来の夢というより目標に近いのですが、社会に出て稼ぐようになったら、今まで一人で私を育ててくれた母親に親孝行の意を込めて、今より良い家へと引っ越したいと考えています。というのも、私の両親が離婚したとき、今まで長い間住んできた家を手放しました。そして移り住んだ家は今までと比べると、とても貧相なものでした。

そのような環境の中でも、母親は私のために一生懸命働き、学業も部活動も支援してくれました。その当時は、明確になりたい職業が決まっていたりした訳ではありませんでしたが、目標として母親への恩返しがしたい、という思いを抱きました。

大学では、今までになかったような、特に社会人の方々との交流が増えました。この稲門会を始めとする、様々な社会人の方々とお話をしていく中で、私は将来何をしたいのかはっきりとわかるようになりました。あまり夢がないように思われるかもしれませんが、私は公務員になりたいと感じました。

そうして公務員を目指すようになった私は、大学の勉強やサークルの練習・バイトなどに並行して独学で公務員試験の勉強も始めました。正直なところ、これら全てをこなすのはとても大変で、最近はサークルの練習を減らしています。だからといって、サークルの交友関係を蔑ろにしているわけではありません。

稲門会の皆様を見ていると、「大学生活で培った交友関係は生涯繋がっていくから大切にしよう」と強く感じました。

●稲門会に貢献できるよう努力を

前述したとおり、私は早稲田の系属校に通っていました。そのため「文武両道」という軸が私の中にはあります。大学生活は人によって様々ですが、私はその軸を中心とした生活を送ろうと励んでいます。

今まではどちらかといえば、サークル等の交友関係を中心に過ごしてきました。しかし、今年は３年生ということもあり、いわゆるインターンシップや、ボランティアのような活動にも積極的に参加していきたいと考えております。

長くなりましたが、最後に改めまして、この度は社会科学部卒業生奨学金受給者として選んでいただきまして、深くお礼を申し上げます。これからも早稲田に、また稲門会に貢献できるような人になるべく努力していきます。大変ありがとうございました。

「社会科学部稲門会」会費納入のお願い

入会手続きと同時に会費の納入をお願い申し上げます。

会費：年間 3,000 円

別途、任意で本会への寄付金一口 1,000 円（二口以上の可）を承ります。

ご寄付いただいた会員のご芳名を会報等に掲載いたします。匿名希望の方は匿名希望とご明記ください。

会費納入方法（振込先）

みずほ銀行　新橋中央支店　普通口座 2231241　口座名　社会科学部稲門会

ゆうちょ銀行　記号 10120　番号 73833861　社会科学部稲門会

三井住友銀行　新宿通支店　普通口座 9218220　口座名　早稲田大学社学二水会　代表　阿川功

（振込時記入例：早稲田桜子　会費と寄付　匿名希望など）

早稲田大学社会科学部卒業生奨学基金の詳細

【趣旨と内容】

「社会科学部卒業生奨学基金」は、経済的支援を必要としていて、かつ向学心に燃えている後輩に対して、社会科学部を巣立ったOB・OG自らの手で、「支援」していこうという趣旨で、平成6年の「ホームカミングデー」に招待された社会科学部第1期生有志により設立されました。

以降、「ホームカミングデー」を迎えた代々（2～20期・30期）の有志によって募金活動（同期生への呼びかけ）が引き継がれ、現在に至っています。募金は毎年、大学に寄付され、募金総額が1,700万円を超えた平成10年より、利子運用による奨学金の給付がスタートしています。

【募金総額】 平成27年3月末現在

64,019,930円（運用利息を含む）

【寄付件数】

1,716件

【奨学生】

現在までの奨学生は42名

【給付対象】

・早稲田大学社会科学部に在学する学生

・奨学金の給付を必要とする在学生の中から、大学規定に基づき社会科学部が選考して決　定

【支給金額】

年間40万円（本年度の給付予定者は4名）

【募金金額】

一口1万円以上ですが、多寡は問いません。

【募金目標】

500万円（本年度）

【募金口座】

〈銀行〉三井住友銀行　高田馬場支店

普通預金　口座番号　１６８６３８４

社会科学部卒業生奨学基金代表　阿川功

〈郵便振替〉00110-0-579115

社会科学部卒業生奨学基金（振替用紙）

社会科学部卒業生奨学基金のホームページ
http://syagakutomonkai.com

【受付期間】

通年、ホームカミングデー当日。「社会科学部合同クラス会」会場でも受付。なお、同席上で今年度の贈呈式を行う関係上、1次締切を10月10日（土）までに手続きをお願いできれば幸いです。

【早稲田学報芳名掲載】

寄付者は早稲田学報寄付者芳名欄に掲載されます。匿名希望の場合は、お振り込み時に匿名ご希望を明記してください。

【寄付金について】

寄付をして下さった方には、早稲田大学よりお礼状とともに、「領収書」および「特定公益増進法人証明書（写）」が送付されます。これらを添付して確定申告をすると、個人の場合は1万円を超える金額について寄付金控除が受けられます。また、法人の場合、寄付金限度額の範囲で損金算入が認められます。

◆募金実績内訳表【校友・教職員・一般・団体・法人】

年　　度	寄付金額	寄付件数	奨学生
1994年度　第 1 期(昭和45年卒)	3,785,656	81件	
1995年度　第 2 期(昭和46年卒)	2,559,000	86件	
1996年度　第 3 期(昭和47年卒)	1,530,000	42件	
1997年度　第 4 期(昭和48年卒)	4,675,000	85件	
1998年度　第 5 期(昭和49年卒)	2,168,000	78件	松尾亜紀さん
1999年度　第 6 期(昭和50年卒)	3,207,000	70件	浅野桃子さん
2000年度　第 7 期(昭和51年卒)	2,371,000	74件	米倉達也さん、他 1 名
2001年度　第 8 期(昭和52年卒)	2,540,000	87件	松田阿良、木村和彦さん
2002年度　第 9 期(昭和53年卒)	2,396,111	65件	上島賢士、松崎　雅さん
2003年度　第 10 期(昭和54年卒)	3,025,000	89件	高村武之、吉本妙子さん
2004年度第 1･11 期(昭和45年卒と昭和55年卒)	3,134,000	143件	石川裕子、東角邦昭さん
2005年度第 2･12 期(昭和46年卒と昭和56年卒)	3,472,460	91件	石田理紗、中里浩之さん
2006年度第 3･13 期(昭和47年卒と昭和57年卒)	2,065,000	75件	井上素子、松岡勇志さん
2007年度第 4･14 期(昭和48年卒と昭和58年卒)	2,900,500	96件	渡部　香、加藤和弥さん
2008年度第 5･15 期(昭和49年卒と昭和59年卒)	2,322,500	77件	佐藤史佳さん、金木雄太さん 洪宇美嘉さん
2009年度第 6･16 期(昭和50年卒と昭和60年卒)	2,337,000	78件	津布久賢三郎さん 親泊友子さん、岡村倫太郎さん
2010年度第 7･17･27期 (昭和51年卒と昭和61年卒と平成8年卒)	5,063,000	78件	丸岡利栄子さん 高田二菜さん、貴島健太さん
2011年度第 8･18･28期 (昭和52年卒と昭和62年卒と平成9年卒)	2,887,000	70件	横田　梓さん、相川　翼さん 渡部早希さん
2012年度第 9･19･29期 (昭和53年卒と昭和63年卒と平成10年卒)	3,224,415	84件	大島由雅さん、島田麻里さん 森下　俊さん(4年)、平　貴衣さん(4年)
2013年度第 10･20･30期 (昭和54年卒と平成元年卒と平成11年卒)	4,173,102	77件	神戸　萌さん(4年)、中山光流さん(3年) 櫻井温子さん(2年)、冨田　到さん(3年)
2014年度第 1･11･21･31期 (昭和45年･55年卒と平成2年･12年卒)	3,249,666	90件	西尾妃南子さん(4年)、勝村将司さん(3年) 稲垣里帆さん(2年)、吉田孝平さん(2年)
累　　計	63,085,410	1,626件	以上、42名

【巣立った奨学生は、42 名に】

1998 年に初めて松尾亜紀さんへ奨学金 30 万円が給付されてから、現在までの奨学生は、すでに 42 名。例年、「ホームカミングデー＆稲門祭」の式典に続く「社会科学部合同クラス会」の場で、本学部長より当該年度奨学生に対して、奨学金の贈呈式が行われています。

昨年の奨学基金贈呈式での2013～2014年度奨学生

お問い合わせは

社会科学部卒業生奨学基金代表（第 1 期生）　〒 160-0022 東京都新宿区新宿 3-11-6 エクレ新宿 11 階
社会科学部稲門会事務局　阿川グループ　阿川功
Te.03-3568-2245　FAX.03-5368-2246

社学 OB・OG のホームページ http://syagakutomonkai.com

再び早稲田の杜に集まろう！

平成27年10月18日（日）

合同クラス会のご案内

早稲田大学では、来る 10 月 18 日（日）に、卒業 15・25・35・45・50 年目に当たる卒業生と当時の教職員の方々を招待する「ホームカミングデー」が開催されます。本年は、昭和 46 年卒業の 2 期生、昭和 56 年卒業の 12 期生、平成 3 年の 22 期生と平成 13 年卒業の 32 期生がともに、当日行われます大学主催によるホームカミングデーに招待を受けることになりました。

つきましては、大学による記念式典の終了後に、教職員の皆様ならびに諸先輩方と、全国から参集する卒業生を交え、「第 22 回社会科学部合同クラス会」を開催させていただきたいと存じます。卒業後 15 年・25 年・35 年・45 年目の節目にあたり、皆様方と共に、暫し歓談の時を持てれば幸甚です。

ご多忙の折ではございますが、何卒ご臨席を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

※出欠につきましては、同封の返信用はがき、またはQRコードで、10月10日（土）までにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

第22回社会科学部合同クラス会

●日　時／10月18日（日）　受付は、12：30から
午後1時～午後4時30分

●会　場／早稲田大学18号館（旧安部球場）

●会　費／5,000円
（ご家族同伴の場合は別途1,000円頂きます）

●式次第
〈13:00〉※講演会開催予定

1　開会
2　合同クラス会実行委員長挨拶
3　社会科学部代表（学術院長）挨拶
4　来賓・教員紹介
5　卒業生奨学基金の趣旨説明
6　奨学基金贈呈
7　乾杯・歓談
8　記念撮影
　1971年（昭和46年）卒
　1981年（昭和56年）卒
　1991年（平成３年）卒
　2001年（平成13年）卒
9　奨学生の挨拶
10　社会科学部の近況報告
11　来賓先生方のご挨拶
12　合同クラス会学年幹事・ゲスト記念スピーチ
13　校歌・応援歌斉唱
14　閉会〈16:30終了予定〉

社会科学部創設50周年

「繋がる奨学金募金」のお願い

奨学金大使の太田さん、緒方さん、
奨学金委員長の川尻さん

社会科学部は来年 2016 年（平成 28 年）に学部創設 50 周年を迎えます。
この間、社会科学部が大きく成長したことは、皆様ご承知のとおりです。

社会科学部稲門会も、学部稲門会として、会則、組織整備を行い従来の「卒業生奨学基金への募金活動」「合同クラス会の開催」を主とした活動から、活動範囲を拡充し、学部との更なる連携強化や在学生との交流を深め、校友会ともパートナーシップを構築し、名実ともに学部稲門会に相応しい活動を展開しています。

その新たなるステップアップの最大のステージが「学部創設 50 周年記行事」です。

早稲田大学内はもとより、更には、社会に対して、社会科学部並びに社会科学部稲門会の存在と意義を広くアピールする最大の機会と捉えて取り組んでいます。

多様化するニーズを捉え、学生、卒業生、教職員と共に考え、共に創り、共に推進していく三位一体となった活動を行っています。

社会科学部半世紀の歴史を振り返り、設置理念である「社会緒科学の総合的、学際的な教育の実践」の更なる発展を目指す 50 周年記念行事を支援すると共に、社会科学部稲門会の基幹である「卒業生奨学基金」を 2015 年 3 月末現在 6,400 万円から 2016 年 10 月の HCD 当日開催される「学部創設 50 周年記念式典」までに、皆様のご協力、ご支援で、奨学基金 8,000 万円の達成をしたいと願っております。

奨学基金 8,000 万円が達成できれば、その年運用利率 2%で、年間 160 万円（40 万円 ×4 名）の安定的奨学金の確保ができます。

また、その後増えていく奨学基金運用金の使い道を、未来に向けて、学生にとって勉学に励みとなるような、学術・文化・スポーツ活動の支援やインセンティブの一部として活用できる奨学基金環境を学部に提案していくこともできます。

皆様におかれましては、すでに本奨学金基金にご理解をいただき、過去、奨学基金へご寄付を賜っている方も、もし状況が許すようでしたら、重ねてのご協力、ご支援をいただければ幸いです。募金金額の多寡は問いません。「社会科学部卒業生奨学基金」活動に賛同、今後も社会科学部をサポートしていくという「思い」をお願い致します。

学部創設 50 周年を皆様と祝うとともに、その成果発表と奨学金贈呈を 50 周年式典で行いたいと思っております。2016 年（平成 28 年）10 月に井深記念ホールで開催される学部創設 50 周年記念式典には全国の卒業生の参加をお願いし 盛大で楽しいプログラム、企画の準備をしていくと同時に、2016 年までのプロセスを大切にし、プロセスを通じて「三位相互の絆」を深め、動員、成果を最大化し、奨学基金 8,000 万円の達成をしたいと切に願っております。

「楽しくなければ社学稲門会ではない」、そんな未来志向の社会科学部稲門会を目指して、社会科学部創設 50 周年記念行事の成功に向けて皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。

2015 年 9 月吉日

社会科学部稲門会・50周年記念実行委員会
社会科学部稲門会・奨学金委員会

第３回社学稲門会総会レポート

社学50周年に向け、「学部・卒業生・在校生」三位一体の結束を！

●「学問」の臨床化と「開かれた学部」の構築

第３回早稲田大学社会科学部稲門会総会は、2015年５月９日（土）に開催されました。会場は南門を出てすぐの小野梓記念講堂で、大きなステージのある劇場型のホールです。ステージ奥のスクリーンに資料を映し出し、議事が進められました。

まず阿川功会長のご挨拶では、関西やベトナムのハノイで社学稲門会の支部活動が始まったというご報告がありました。また社学稲門会は社学卒業生の心の故郷として、社学を応援する会としてあり続けたい、「早稲田を、社学を楽しもう」をモットーに来年2016年の学部創設50周年記念事業にむけて「学部・卒業生・在校生」が三位一体になって盛り上げていきましょうとのお話をいただきました。

次にご来賓の早稲田大学理事の畑恵子先生からご祝辞をいただきました。畑先生は２年前の第１回総会の時には社会科学総合学術院長としてご出席され、大隈講堂前での記念撮影のことや懇親会で参加者との楽しく懇談をされた思い出をお話しいただきました。2014年11月に早稲田大学の理事に就任されてからは、男女共同参画を担務し早稲田大学のダイバーシティの推進にもご尽力していらっしゃいます。

続いて現在社会科学総合学術院長の西原博史先生にご挨拶をいただきました。西原先生は2014年９月に学術院長に就任されましたが、「社学人」としての始まりは25年以上も前に時岡弘先生のお誘いを受け、講師として教壇に立ったのが始まりだったとのことです。社学は現在でも「社会に開かれた学部」という看板を掲げていますが、勤労学生や地方出身学生の減少は続いており、昼間部完全移行に伴い草創期の社学とは様相が変わってきています。そこで社会科学部で学んだ学問が社会と密接な関係を構築するという意味での「学問の臨床化」を進めることが新たな「社会に開かれた学部」を築くことにつながるのではないかとのお話をいただきました。

奨学金大使とハノイ支部の斉藤さん

●新役員の承認、そして校歌斉唱へ

総会の議事は、2014年度の会計報告および監査報告、2015年度の予算案の報告と説明があり、参加者の承認を得ました。続いて当会の会員資格や役員規定など会則の一部改定について藤瀬事務局長より説明があり、同じく承認を得ました。その後2013年度に選

香瑠鼓さんの講演とワークショップの後で

応援に駆け付けた応援部チアのお二人

出された役員の任期満了に伴う改選と新役員の承認を得ました。

続いて各委員会からの2014年度の活動報告と2015年度の活動計画については、財務委員会の古越久之氏、事業委員会の夏越英成氏、広報委員会の伏見英敏氏、奨学金委員会の川尻光昭氏、組織委員会ならびに社学創設50周年社学稲門会記念事業委員会の佐藤和美氏、事務局の藤瀬敏彦氏の各委員長と事務局長から説明がありました。

議事終了後は1997年卒業（平成8年度応援部主将）の土居薫さんの指揮による校歌・都の西北の斉唱となり、大団円を迎えました。

●社ガール企画の香瑠鼓さんによる講演会

続いて今回初めての試みとして卒業生による講演会を開催しました。企画は社ガールの会の皆さんです。今回の講師は1981年卒業の香瑠鼓さん（五十嵐薫子さん）。香瑠鼓さんは、テレビCMや舞台の振付をする振付家・アーティストととしてご活躍され、慎吾ママの「おはロック」、新垣結衣の「ポッキー」等、手掛けた振り付けは1000本以上。振付と併せ、20年にわたるライフワークである「バリアフリーワークショップ」から開発した「ネイチャーバイブレーションメソッド」が近年注目を浴び、東京大学や企業、自治体でのワークショップを手掛けています。即興アーティスト集団ApicupiA（アピキュピア）を主宰し、定期ライブ「アピフェス」やネイチャーバイブレーションシアター／バリアフリーライブ「あぴラッキー」など舞台公演も多数実施されています。

前段の講演では、在学中から携わってきたダンスや振付家としての経緯や思い入れを語られました（今号の会報の連載特集「第2回がんばれ！同窓生」をご参照ください）。

またワークショップでは、会場に集まった皆様にネイチャーバイブレーションメソッドの一部を実演指導していただきました。相手のありのままの姿を受け止め合い、コミュニケーションするというメソッドに参加者全員が体を動かしてチャレンジするという画期的なシーンが展開されました。さらには、ApicupiAからダンサーの方も応援にいらっしゃり、即興ダンスやパフォーマンスを実演していただきました。

●記念撮影後、高田牧舎にて懇親会を

大隈講堂前での記念写真撮影の後、高田牧舎に場所を移して懇親会の部に。懐かしの高田牧舎にて懐かしの旧友との会話や初めて会う先輩や後輩との会話に花が咲き、楽しい時間を過ごすことができました。現役の応援部のリーダーやチアの皆さんも駆けつけ、間近で力強く華やかな紺碧の空、都の西北の指揮をとってもらいました。

次回、たくさんの同窓生が集まるのは、10月18日（日）のホームカミングデー・稲門祭です。今年は、旧安部球場跡地に建てられた井深ホールと会議室をお借りして合同クラス会（昭和46年卒、昭和56年卒、平成3年卒、平成13年卒が当該年次）を実施するとともに、2016年の社学創設50周年記念事業のプレイベントを開催する予定です。

もちろん、当該年次以外の方も参加できますので、同窓のご友人お誘い合わせの上、多数ご来場いただけますようお待ち申し上げます。

懐かしの皆さんと歓談

コンバットマーチ炸裂！

東日本大震災被災地支援活動「復興BAR@銀座」

継続的な東北復興支援を考える

●「復興BAR@銀座」で１日マスターを

東日本大震災から約４年半。ややもすると日常生活のあわただしさの中にあの大災害の記憶が薄れてしまいがちですが、現実にはまだなお 20 万人超の方々が避難生活をしています。私の郷里、宮城県石巻市は人口 15 万人ほどの小さな町ですが、まだ１万人超の方々が仮設住宅生活を余儀なくされています。もともとの居住区でも浸水地域には家を建てられず、高台移転地の造成を待ち切れずに故郷を後にした人々も多いようです。

「どうやったら継続的な被災地支援ができるだろう」と考えていた時に出会ったのが、『復興 BAR @銀座』でした。ISHINOMAKI 2.0 のメンバーが石巻で 2011 年７月に開店した『復興 BAR』を東京に住む東北支援会の皆さんが銀座でもやってみようと始めたのが 2013 年の６月。被災地の食材を食べたり飲んだりして思いを馳せることが一番身近な支援ではないかという考えに多くの方が賛同し集まってくださいました。いろいろな思いを持ったいろいろな人たちが日替わりでマスターを務めるお店です。私も１年目は常連客として、２年目は高校の友人がマスターの時に応援で参加しました。３年目の今年は、東京在住の石巻出身者に応援を呼びかけて１日マスターをすることになったのです。

●「チームイルマッジョと行く三陸食べる観光」がテーマ

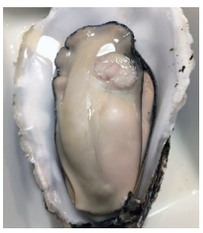
７月４日土曜日『チームイルマッジョと行く三陸食べる観光』がテーマです。新橋のイルマッジョというお店を経営する高校の同期の女性が料理の監修。マスターメニューのウニ、牡蠣、ホヤ、ホタテ、金華サバを中心に食材は全部石巻から仕入れ、日本酒も地元の日高見、墨廼江を用意しました。１枚 540 円のチケットを何枚か購入してもらい、それに商品番号とお名前を書いて注文していただくスタイル。

復興BAR@銀座

社学稲門会の皆さま

ホヤ刺し

ホタテ刺し


蒸し牡蠣

日高見と墨廼江

復興BAR@銀座2015ランキング

余裕を持って準備したつもりでしたが、新鮮な魚介類はあっという間に売り切れ、厨房の中はてんてこ舞いでした。ちょうど旬のウニやホヤ、そして産卵前の完熟牡蠣などを堪能していただけたかと思います。三陸の食物を味わって思いを馳せてもらえたらなぁ、そしていつか観光で現地に足を運んでもらえたらなぁという思いが伝わったようで嬉しく思っています。

社学稲門会の皆さまにも多数お運びいただき感謝感激でした。ただ予想以上の込み具合で十分にご挨拶や歓談する暇もなく大変失礼してしまいました。御礼かたがた陳謝申し上げます。

６月 26 日から８月８日のうち 41 日間の稼働日で延べ約 6000 人のお客様にお越しいただきました。おかげさまで私たちのチームも約 230 名の客様がお見えになり、売り上げも第 10 位でした。利幅が小さいので収支はトントンで、ほんの少しだけ地元のボランティア団体に寄付することができました。

東京と東北をつなぐ、生産者と生活者をつなぐというコンセプトから出発した『復興 BAR @銀座』。これからも都市と地方の物的・人的交流を活性化させ、新たなライフスタイルやコミュニティづくりに微力ながら一枚噛んでいきたいと思っています。来年もご案内いたしますので今後ともよろしくお願い申し上げます。　**（伏見英敏）**

チームイルマッジョのメンバー

平成27年度「社学稲門会」年間予定表

学部予定	定例会議		イベント	
	定例会 日時・場所	内容	イベント	主なイベント準備内容
4/1入学式 (全学部 4/6(月)春学期 授業開始 前半4/6～6/5 後半6/6～7/31	4/8(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・総会準備(進行案提案) ・講演者の確定 ・総会後懇親会進行案提案 ・第3回総会案内郵送報告、メール対応報告 ・各委員会報告 ・50周年記念実行委員会からの進捗報告 ・年会費自動引落とし契約進捗報告 ★第3回総会に向けての最終確認	●社学社長会(仮称) 懇談会　4/2(木) ★「50周年記念事業実行委員会」への 社学稲門会案提案	第3回総会役割分担打ち合わせ 組織委員会、事業委員会、他 ●「社学50周年記念事業実行委員会」への社学稲門会50周年記念計画の提案と摺合せ確認、調整を行う。 ★5/9第3回総会で2016年50周年事業の概要が話せるように 50周年事業計画の精度を高める
春学期中間 試験 5/30(土)～ 6/5(金) ※臨時休業日 5/7(木) 5/8(金)	5/13(水) 社会科学部 14号館801 会議室	●第3回総会に向けて最終確認 (4/20～ゴールデンウイーク前までに) ・総会参加人数報告 ・総会時の役員、担当委員会報告内容確認 ・総会当日役割分担確認 ・貸与、準備品の最終確認 ・26年度会計報告確認 ・各委員会報告 ●総会総括(結果、収支概況報告) ・総会出席者(来賓)へのお礼状郵送 ・50周年記念実行委員会報告 ※4月教授会報告フィードバック	5/9(土) 社会科学部稲門会 第3回総会 「小野梓ホール」 12:00～13:30 懇親会は 「高田牧舎」 16:30～19:00 ★役員・担当者 8:30集合のこと	・合同クラス会会場予約(学部→校友会)　※5/23(金)締切 ●2014年度ホームカミングデーイベント参加企画申請書 →学部担当者篠田様⇒校友課ホームカミングデー担当井深記念ホール 開始時間13:00　終了時間15:00 ・ホームカミングデー式典後、社会科学部卒業生有志(社会科学部稲門会)による合同クラス会(パーティー)を開催。 「社会科学部稲門会合同クラス会」
	6/10(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・総会総括 ・総会出席者へのお礼状郵送(集合写真含む) ・各委員会報告 ・50周年記念実行委員会報告 ・本年度合同クラス状況報告 合同クラス会式次第、役割分担表 備品リストチェック	★早稲田学報に投稿	●宛名ラベルの依頼※6/21頃(6月中旬) ・校友会員住所情報提供申請願い ・校友会員住所情報提供申請兼誓約書(校友会指定用紙) ●封筒・振込用紙の在庫確認 ●50周年記念事業7月教授会で確定する見込みなので、 50周年記念事業実行委員会で最終決定⇔教授会審議の資料準備
春学期教場 試験期間 7/18(土)～7/24 (金) 春学期定期 試験 7/25(土)～ 7/30(木) ●春学期授業 終了7/31(金)	7/8(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・合同クラス会 に向けて 合同クラス会該当年次勧誘状況報告 ・各委員会報告・50周年記念実行委員会報告	■入会金 銀行自動 引き落とし システム稼働	①合同クラス会案内状(合同クラス会のご案内) ②基金募金の案内状(社会科学部卒業生奨学基金への募金のお願い・社会科学部卒業生奨学基金の詳細) ③会員・奨学生の招待状 ④元・教職員の招待状 ⑤社会科学総合学術院長の「卒業生の皆様へ」の挨拶文 ⑥社会科学部合同クラス会実行準備委員会・卒業生奨学金事務局名簿 ⇒7月下旬①～⑥の印刷
夏季休業 8/1(土)～ /20(日)	8/19(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・合同クラス会準備関連報告 ・記念写真撮影班について ★合同クラス会案内状郵送作業について ・各委員会報告・50周年記念実行委員会報告 (50周年記念事業の合同クラス会盛り込み内容検討)		●中旬合同クラス会運営スケジュール作成 ●式次第・役割分担表・備品リスト作成 ●読売新聞等同窓会掲載依頼 ※大学よりホームカミングデーの通知が卒業生へ発送される8/15頃 ★8月22日(土)9:30～ご案内状郵送作業　14号館801室借用
9月入学式 9/21(月) 秋学期開始 9/24(木) 秋学期授業 開始9/25(木) 前半9/24(木) ～11/2(土) 後半 11/22(日) ～2/4(木)	9/9(水) 社会科学部 14号館801 会議室	★合同クラス会案内状郵送内容報告 合同クラス会役割分担精査受付体制 記念写真撮影班の体制 ・勧誘状況、参加状況報告 ●合同クラス会時50周年記念事業の 掲示内容の確認	★秋季代議委員会 9/26(土) ●合同クラス会 集合時間受付体制 記念撮影班の体制	※招待者の選定とリストの作成、招待状の作成・印刷・発送 ●応援団出張依頼 ●ケータリングメニュー確認・発注 ●司会シナリオ原案作成 ●奨学金目録作成 ●合同クラス会出席者リスト作成
※10/21(水) 創立記念日 (授業実施)	10/14(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・合同クラス会役割分担等 合同クラス会最終確認 ・合同クラス会進行台本骨子の説明、 ・記念写真撮影班について ・各委員会報告 ・秋季代議委員会報告	10/18(日) ホームカミングデー 卒業生による講演会 など10:00～ 「井深記念ホール」 合同クラス会 13:00～15:00 懇親会も同会場	・★合同クラス会最終確認・運営スケジュール・司会シナリオ細部の確認 ・横断幕・案内図印刷・名札、胸花・領収書(2種) ・奨学金目録・つり銭・その他備品 ●出欠者リスト・募金者リスト ★10/18(日)ホームカミングデー式典・稲門祭 例年とは違い、記念講堂修復のため、ホームカミングは、 大隈講堂核に3号館、15号館、14号館で実施する。(同時中継)
早稲田祭 11/7(土) 11/8(日) 体育祭 11/5(木) 学部デー 11/9(月) 11/10(火) 秋学期中間 試験 11/16(月)～ 11/21(土)	11/11(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・稲門祭、合同クラス報告、 ・記念写真模擬店、記念品販売等の報告 ・各委員会報告 ・50周年記念実行委員会報告	★50周年記念事業の 確定スケジュール 掲示 ★第4回総会の 日時、講演会等 決定	●合同クラス会総合報告 ●出席者リスト提出・募金者リスト更新提出 ●総括、引継書類の作成・提出
冬季休業 12/23(月)～ 2016年1/5(火)	12/9(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・来年度実行委員勧誘について ・各委員会報告 ・50周年記念実行委員会報告	◆忘年会(初旬) (クリスマス会)	
授業休業日 1/6(水)～7(木) 秋学期教場試験 1/22(金)～1/28 (木)	1/13(水) 社会科学部 14号館801 会議室	来年度実行委員の決定と紹介 各委員会報告 50周年記念実行委員会報告	◆新年会	来年度平成28年度合同クラス会該当年度(50周年記念年度) ・1972年度卒　・1982年度卒　・1992年卒　・2002年度卒
秋期定期試験 1/29(金)～2/3 (水) 秋期授業終了 2/4(木)	2/10(水) 西北の風 会議室	2016年(平成28年度) 4回総会について		
春季休業期間 2/5(金) ～3/31(木) 3/25(金) 学部卒業式	3/9(水) 社会科学部 14号館801 会議室	・春季代議員会報告 ・2015年度各委員会総括発表 ・2016年度各委員会重点活動発表	★春季代議員会 3/5(土)	

編集後記

今年こそは早めに準備しようと思いつつも、ぎりぎりまでかかってしまい関係者の皆様にご迷惑をおかけしました。おかげさまで OB・OG のインタビュー企画も 3 連発。聞き出すことのむずかしさ、書き起こすことの苦痛を感じつつもご活躍中の方々の生の声をお届けできたのではと思っています。なお WEB 版は、多少ページ数が増えても大丈夫です。通常のウェブマガジンや会報にも近況やお知らせをお寄せいただけると助かります。 **(伏見)**

■

今回初めて広報誌編集に関らせていただき、『がんばれ同窓生』コーナーのジョブウェブ・佐藤会長へのインタビュー取材などを担当しました。

大先輩から現役学生まで幅広い読者を持つ会報誌なので、みなさんに楽しんで読んで頂けるように今後もがんばりたいと思います。

取材や編集を手伝ってくれるサポートメンバーを募集しています。母校の会報誌を一緒に作ってみたいという方はこの機会にぜひご連絡ください。よろしくお願いします。**(下地)**

■

〈新広報委員募集中！〉

社会科学部稲門会広報委員会では、広報活動を通して社会科学部稲門会を一緒に盛り上げてくれる現役学生・OB・OG の仲間を募集しております。

下記アドレスまでお気軽にご連絡下さい。

■主な広報委員会の活動
- OB・OG の取材活動
- 各種イベントの広報活動
- 会報誌の取材・編集活動
- 各種媒体（学部掲示板・WEB メディア）の運営管理活動

■連絡先：pr@syagakutomonkai.com

（担当：佐藤）

編集担当

川端光明 (S54 年卒) 藤瀬敏彦 (S54 年卒)
米津　昭 (S57 年卒) 西宮正明 (S57 年卒)
伏見英敏 (S58 年卒) 佐藤英明 (H18 年卒)
下地彩子 (H18 年卒)

発行　「社学稲門会」編集委員会
発行人 早稲田大学社会科学部稲門会
〒 160-0022
東京都新宿区新宿 3-11-6　エクレ新宿 11F
阿川グループ 阿川功 気付
TEL.03 (5368)2245 FAX.03 (5368)2246
E-mail：info@syagakutomonkai.com
http://syagakutomonkai.com/

早稲田大学「社学稲門会」ホームページ

http://syagakutomonkai.com/

このホームページでは、「社会科学部卒業生奨学金」制度の概要、基金の収支、活動の近況などを報告しています。また、この運動を支えている OB・OG の会＝二水会（毎月第２水曜日に打ち合わせ）の活動、親睦の報告なども紹介しています。なお、この「会報」のバックナンバーについても、今後掲載を予定していますので、ご期待いただければと思います。ぜひ、一度アクセスしてみてください。

「Facebook,Twitter」
もご活用ください！

「社会科学部稲門会・第３回総会」

大隈講堂前の記念撮影も終わり高田牧舎に向かう皆さん

校歌斉唱